

第15回 蘇東坡は杭州への自由な旅を語り始めた

——吾^わが行^こもまた偶然なり

2018年4月18日（水）。

「夜勤の仮眠つてさあ、夢を見るほど眠れるわけじゃないんだけど、なんか妄想とか湧いてきやすくなるみたい。たぶん、あやしいものがうろついてたりするんじゃないのかなあ」

「そうなんですか。わたしは夜勤の経験がなくて、介護職としてはアマチュアだろうなあと常日頃思っているのですけれど、夜勤中というのはいろいろとあるらしいですね。幽霊とか出るという人も、たまにいますよね」

「ボクはそういうのを見たことはないけど、休憩時間に少しだけでも眠ろうとして横になると、頭にあれこれくだらないことが浮かんできちゃったりするんだ。

それでね、思い付いちやったことがあって、こんなのを昨日書いてみたんだ。叔父さん、見てくれない」

「なんですか。はあ、もしかして小説みたいなものだったりしますか」

「どうかな。まだほんの始まりの部分だけだけど、もしかして、叔父さんよりじょうずだったりしない？」

「誰も読む人のいないわたしのよりも下手ってことは、ありえないでしょう。読み手がゼロ以下、マイナスというところどういことになりますかねえ。まずは、御玉稿を拝読させていただきましようか」

「ゴギョクコウ……早口ことばみたいだね。3回続けていえる？」

2123年9月1日。昼。

これまで経験したことのない極低音の響きだった。どこからか聞こえてくるのではなく、この世界全体が低くうなり始めた。

俺は枝から飛び立った。この奇妙な響きから逃れようと、まっすぐ上空に向かった。すると、今度は高音の、シャツという音が大气全体からしてきた。

俺はぞっとし、地上にもどるべきかと下を見た。飛び立ったばかりの木が、ぶるぶると震えた。風があるわけでもないのに、ゆさゆさと左右に揺れ出し、太い幹が、竹のように激しくしなった。

林も町もどこもかしこも揺れ動き、得体の知れないありとあらゆる音がした。

俺はもつと高くに行こうとした。

丘も揺れていた。切り立った崖の下に、太郎とMがいた。丘がぼわっと風船のように膨らんだ。

——危ない！

丘は膨らみすぎてはじけた。

これはチャンスかもしれないと、俺は思い返した。

はじけて飛んだ丘の土砂がMの上へとなだれ落ちた。太郎はそれよりも前に転び、無様な格好でころころと斜面をころがった。Mは土砂の下敷きになり、太郎は土砂が流れ広がった縁よりも少し先で気を失った。

音はやみ、大地は揺れなくなった。

Mを埋めた土砂から灰色の煙が昇り、太郎はのびたままだった。

——こういふときがくるのを待っていたのだ。

俺は胸の高まりを抑えられず、より上空へと昇った。

海が視界に入ってきた。遙か沖の方まで海水が消え去り、海の底が見えていた。

次に何が起こるのか俺にはわかった。俺はあわてて急降下し、太郎の背に乗り、

「カー」

ひと声鳴いた。

太郎は動かなかった。死んでいるはずはないと、俺は太郎の尻を軽く突いた。ぴくりと反応があった。

「カー」

もう一度大きく鳴くと、背中を強く蹴って飛び上がり、かたわらの木に身を潜めた。

太郎はもそもそ起き出し、ぼんやりとあたりを見回した。

「あろう……」

小さくつぶやき、崩れた土砂の方へ、よたよた上って行こうとした。

——仕方あるまい。Mがいないと何もできない。生まれたときからそう仕込まれているのだから。俺だってそうだった。

また地面が揺れ出した。俺は木から離れ、太郎は悲鳴を上げ、横ざまに飛びのいた。

丘がまた膨れ、崖がさらに崩れた。太郎は今度はころばずに、よろよろしながら坂を上った。

——そうだ、そうだ、なかなかいいぞ。

土砂は、念には念を入れるかのようにして、Mが埋もれているところの上に重く覆いかぶさった。

地面の揺れがおさまると、太郎は足を止め、崩れた土砂の方を見た。からだがふるえていた。頭を「こんこん」と何度も叩いた。

低い響きが海から聞こえてきた。見ると、遠い水平線が真っ黒になっていた。

——いよいよよくなるぞ。

「ぼくって……」

太郎がつぶやいた。

俺は太郎と海に、交互に視線を送った。

太郎はMを下敷きにした土砂に向かって、

「さようなら」

あっさり別れを告げた。

——案外いい判断をしてくれるものだ。

黒い海が陸地に向かって迫ってきた。

とんでもないことになるだろう。しかし、このろくでもない世界を変えてくれるとしたら、こういうことでしかないのだろう。

太郎は坂を下り始めた。

——そいつはよくない！

俺は坂の上の方にまわり、

「カー、カー、カー」

三度鳴いた。

それは太郎に通じたのだろう、頭をぐんぐんたたくと、逆向きになって坂を上ってくれた。

——よし、よし、うまいぞ。

すでに津波は海岸に達していた。

少なくとも太郎だけは俺が助けなければいけない。

「カー、カー、カー」

俺が懸命に鳴くと、太郎はさらに上に向かった。

超低音から超高音まで、ありとあらゆる音がした。

俺は悪寒に震え、太郎はまたころんだ。幸いにもそこはすでに安全な場所だった。

津波は海岸を呑み込み、街を呑み込み、林を呑み込み、丘の縁に襲いかかった。

そこまでだった。しゃがんだまま震えていた太郎は水しぶきをあびることもなく、津波は引いて行った。

太郎は立ち、海の水がありとあらゆるものを持ち去って行くのを見た。崖の下には何も残らなかった。

「カー、カー、カー」

俺が鳴くと、太郎は坂を上り、小さな洞穴の前まで来て足を止めた。それは古くからある洞穴で、いまの地震でもびくともしていなかった。

「ちきしょう」

太郎はつぶやいた。

俺はひらりと翼を返し、太郎の頭をかすめて洞穴の中へと飛び込んだ。

「消えてなくなれ！」

太郎は叫んだ。

頭をまたごんごんたたき、

「もしかして、本当に消えてなくなったのか。それで、このぼくは、このぼくは……」

うめきながら洞穴の中に入ってきた。

外の光の及ばない奥にまできて、また地面が揺れ、太郎その場に伏せた。

「どうせ、どうせ、みんな消えてなくなつたんだ」

揺れがおさまると、足をかかえてしゃがみ直し、

「ちくしょう」

と、またいった。

俺はわざと、ことりと音を立てた。

「えっ、だれかいるの？」

「カー」

「カラス……」

「はははは、俺はカラスじゃない」

「だれ？ 『カー』って鳴いて、でも、しゃべっている」

「Once upon a time 俺は君と同じ人間だった。君と同じように、『消えてなくなれ!』と、叫んだ。俺は君となら話ができそうな気がしていた。今日ついにその日がきた」

「ぼくのことを知ってたの?」

「ああ。だけど、君にはMがいた。Once upon a time 俺は君と同じ人間だった。そのとき、君と同じように、俺にもMのようなやつがいた」

「えーと、これって、もしかして、わたしが昔書いた『太郎』のパロディってことですか」

「たぶん、そうかもね」

「SF風に変えたのですか。2123年っていうと、いまから100年余り先ですよね」

「関東大震災をもたらしたような大地震って、200年に一度くらいの間隔でおこるんだよね。それでちょうど200年後の日付にしてみました」

「Mっていうのはなんなのですか。生まれてからずっと太郎にくつついていたらしいってことだけはわかりましたけど」

「なにかっていうのをボクが説明しちゃったらつまんないよね。作品のなかで書かないとね」

「この続きは書くのですか」

「こないだの妄想はここまでだったんで、終わりかも。次の夜勤で、あやしいものがまたきたらどうなるかわからないけど」

「わたしの作品のパロディなら、自由に作ってくれて、むしろうれしいのですが、冗漫な書き方までは真似しないでいいと思います。こんな調子で書いていったら、

長い小説になってしまいましたよ」

「同じ旋律でも、ゼンゼン違うものになる可能性はあると思うんだけどなあ」

* * *

㊦

都を去る人々を見送ることの回数を重ねていた私も、熙寧きねい4（1071）年7

月、杭州こうしゅうに副知事として赴任するべく船に乗り込みました。都からの旅はこれが

4度目でした。

——4度……そうだっけ。ちよつと待つて、意外とまじめにボクが聞いてるってことを、ここで証明してみせよつかなあ。

1度目は、科擧に合格した直後にお母さんが亡くなって故郷に帰ったときだよ

ね。2度目は、最初の赴任地である鳳翔ほうしょうに行ったとき、そして3回目は、奥さんとお父さんの棺を船に載せて故郷に帰ったとき。当たり前だよね？

㊦ まさに正解です。完璧です。よく聞いて下さって嬉しく思います。

——これはわりと簡単にわかりそうだったから、自分から答えてみせたんだ。
蘇東坡そとうば検定試験でいうと、せいぜい初級くらいだろうね。人物の名前とかがからんでくると、さすがにわかんないよなあ。数が多すぎるんだもの。

㊦ 旅の始まりは7月で、昔の暦では秋。しかし、まだまだ暑い盛りでした。杭州に着いたのは11月、すでに冬でしたが、杭州は長江ちやうかうよりも南、海に近いところ

ろで、都に比べるとずっと温暖で湿潤で、まだまだ秋の雰囲気でした。今夜はこの4カ月間ほどの「游たひの奇絶」を聞いていただきましょう。

——4カ月間の旅かあ。ちよつといいかも。よく知らないけど、いまなら飛行機とか新幹線とかを使って1日くらいで移動できてしまっただろうね。それと比べて昔の旅は大変だったってことなんだろうけど、移動中に長く日常から離れられるのっていいのかも。

ボクなんか、これまでで一番長い旅行っていうと、せいぜい10日間かな。ジョン・クレアの生家を見にイギリスに行ったときがそうで、はるばるきたなあって気がしたけれど、それでも、ボクらの感覚って、そもそもジョン・クレアの時代の人々の感覚とはまるっきり違うんだらうなあって改めて思った。はるばるっ

ていったって、日本から飛行機でビューンと飛んできただけなんで、そこでもうまるつきりずれちゃってるんだよ。つまりさあ、日本での日常をそのまんまからだにくっつけ、ジョン・クレアの生家の前に立ってるんだよね。それで2、3日そこらをうろろしたってなんにもわからないよ。だから、ジョン・クレアが近くなったというよりは、よけいに遠くなったような気がしたりした。

いまのこんな説明でわかってもらえたかどうかかわかないけど、昔むかしのジョン・クレアに接近するのはそう簡単なことではないって実感したんだ。4カ月くらい旅をして、徐々に近づいて行って、2、3年滞在したら、まだ可能だったりするかもしれないけど……それでも無理なのかなあ。

ト ともつな

纜を解き、橋のたもとの船着き場を離れ、川の流れに乗りますと、船はす

ぐに速度を上げ、見送りの人々は瞬く間に小さくなり、水路が大きく曲がって水門から飛び出しますと、そこからは城壁の外の世界、たちまち都は後方へと消え去り、それとともに、私にまわりついてきた都での重い日常がするするとはどけ、体が軽くなって行くような感じがしました。

「瞬く間」とか「たちまち」とかの表現を用いましたけれど、これは当時の感覚でのことで、新幹線や飛行機のスピードに慣れたいまの人にとっては、船はごくゆつくりとしか動かなくて、いつまでもいつまでも都の姿が見え、そこへの思いを断ち切り難いといったことになったりするのでしょうか。

船尾に立って後方を見続けていた私は、次第に気持ちが高ぶり、右手を大きく振り上げ、持っていた紙の束を勢いよく空中へ放り投げました。

「そのようなことをなさってよろしいのですか」

馬正卿はせいけいが驚いたように言い、すぐに、

「よろしくないとわかっておられるからこそなさるのでしようなあ」

と、笑いました。

「まあ、よろしくないのだろう。しかし、本当によろしくないのはあれだ。虚言とはもうこれでおさらばだ」

紙の束はすぐにはらけ、あるものは風を得て舞いのぼり、あるものはくるくると回転しつつ次の行き先を求め、あるものはすくと水に落ちて行きました。

「あそこにもしも一つでも真実の言葉があるのなら、この手元に戻って来るであらう。さあどうだ」

私は右腕を高く突き上げ、手招きをしました。当然のことながら、もどつて来る紙は一枚もなく、遅かれ早かれ全てが波間に消えてしまいました。

「もし見られたら人に憎まれましたように。まあ、ここまで来れば、誰も見る者がいないのはわかっておりますけれど」

川に投げ棄てたのは、つい先程人々が詠んでくれた送別の詩。

「人は見るまい。だが、『天知る、地知る、我知る、きみ子が知る』だ。だからこそ真実の言葉しか要らぬのだ。虚言によって川の水を穢けがしてしまったことを、河の神に謝らなければならないだろう」

私は川に深々と頭を下げました。

——えーと、都を離れるにあたって贈られた詩を川に投げ入れてしまったんだね。たしかに、詩を詠んだ人が見たら、気分悪いだろうに……。

㊦ 前は私が贈った送別の詩を幾つか聞いていただきました。自分の心情を隠すことなく詠んだと、あなたにはご理解いただけだと思います。心許せる相手であるとは知っていたからそうしたので、同席した人々の中にはとまどいの表情を浮かべる者もいました。

改革に反対し続ける私の立場がより厳しくなるにつれ、多くの人々は私から距離を置くようになり、私も人々に迷惑をかけぬよう、詩を詠むのをより控えるようになりました。私自身の送別の宴では慣例に従って詩の贈答が行われはしましたが、人々も私もごく当たり障りのない平凡な字句を並べただけでした。

——波風を立てないよう、空気が読めるのが大人の分別ってことなんだろうなあ。ボクんとところの叔父さんは、だれも読まない小説を嬉々として書いてるへんな

人だけど、なんでそんなことをしてるのかっていうと、会社の間管理職になっちゃって、立場上心にもないことをいわないとならないというのが耐えられなかったんだって。組織を運営するには、そういうことが必要だっていうのはわかってるけど、そんなことをしているうちに感覚がどんどんマヒしてしまうのがこわかったみたいだね。つまり、「記憶の限りでは」とかいつっちゃって、だれが聞いてもウソだとわかるようなことを、顔色ひとつ変えずにいえるようになってしまった。りしたら、官僚として有能だとほめられても、人間としてはおしまいだもんなあ。

Ⓣ 私も官僚でありましたから、「大人の分別」なるものを身に付ければ何かと良かったのでありましょう。都での最後の日々は、かの阮籍げんせきにいくらか習い、口を閉ざすべく努めておりましたが、船が流れに乗るなりそうした努力をすぐに放

棄し、無作法な行為に及んだのでした。

船の舷側に立ってそれとなく私の振る舞いを見ていた長男に、

「邁^{まい}よ」

呼び掛けると、息子は一瞬びっくりとし、あわてて背を私の方に向け、景色に見入っているかのようなそぶりをしようとはしましたが、

「邁よ、そなたに聞いてみたい。そなたの目に、都はどのように映ったのか。聞かせてはくれぬか」

私の問いに、知らん顔はできないと観念し、半歩下がりながら向き直り、まず馬正卿に視線を送り、それから首を小さく振ってうつむき、

「あのお、正直に申してよろしいのでしょうか」

「真実の言葉しか要らぬと、いま言った通りだ。思うがままに言えばよい」

息子は顔を上げ、

「それならば申し上げます。都と言えば、お上の仕事をする官員かみになった者であるのならば、都においてこそ立派な仕事をしたいと、誰もが志すのだろうと思います。庶民にとっても繁華な都は憧れの場所でありましょう。しかし、わたくしは……あのお、正直に申し上げるのですが、3年前に眉山びざんを発つて都に向かったときに、実を言えば、いやいやでたまりませんでした。そのような思いを抱いてはいけないとわかっておりました。だから、自分の気持ちを変えるよう努力をしましたが、そのようなことは誰にも言いませんでした。もしも気付かれたら、叱られてしまうのではないかと、怖い気持ちもありました」

息子はまたうつむいてしまいました。

「そうか、あのころそのような思いであったのか。叱りはしない。正直に言って

くれるのが何よりも良い」

「隠しているつもりでも、たぶん、馬正卿さんには知られてしまったのだろうと思います」

「いえ、私めは何も存じません」

馬正卿は否定しましたが、

「そなたが何やら悩ましげであるのは、馬正卿ならずとも、この父にしても一切何も気付かずにはいたわけではない。母も案じておった」

「そうだったのですか。申し訳ありません」

「謝ることはない。そなたは何歳になった」

「14歳です」

「その年頃なら、なおのこと、思ったそのままを表に出すので良い。無理に隠そ

うとする必要はない。いや、これも叱っているのではない。今日は正直に言ってくれて嬉しく思っている。で、どうして都に行くのがいやだったのか、その理由をありのままに聞かせてはくれぬか」

「はい。今回よりも前に都にいたときのことです、そこでお祖父様が亡くなり、母上も亡くなりました。今度また都へ行けば、また何かよくないことがあるのではないのかと、それが恐ろしく思えてなりませんでした。それだけではありません。眉山にいる間に、わたくしはあそこが好きになりました。母上がお生まれになった青神せいしんがとても懐かしく思えるようになりました。あそこにいる方々が大好きで、あそここの景色も大好きでした。だから、離れたくなかったのです。旅に出て、途中で鳳翔ほうしょうに寄りました。せめてここで旅が終わらないだろうかと思いましたが、どうしてかというところ、鳳翔には母上との思い出がたくさんあるからです。ご

めんなさい。正直にと、何でも言い過ぎてしまいました」

息子は後ろを振り返りました。息子が話を始めたとき、そこに妻の心配そうな顔がのぞいていたのですが、すでに消えていました。

——ちよつと待つて。船の上の状況を確認しておきたいんだけど、「妻」といつているのは、眉山を出るに当たつて結婚した新しい奥さんのことだよ。息子さん、鳳翔にはお母さんとの思い出がたくさんあるといったのは、前の奥さんのことだよ。そして新しい奥さんは前の奥さんの姪だったんだよ。そのあたりのことも、息子さんにとってはビミョーな感じだったつてことなんだろうね。そして、都にきてから新しい奥さんが男の子を生んだんだよ。息子さんも実はなかなか大変だったのかもね。

㊦ かのシンデレラの話にあるように、ままはは継母が自分の生んだ子だけを可愛がり、

先妻の子をないがしろにするということは、昔の中国において稀であったというわけではなく、とりわけ皇位の継承がからんだときなどには、実に凄惨な事件が幾度となく起こっています。私にしても無頓着であったわけではありません。幸いにも、特に何も言わなくても馬正卿が上手にフォローしてくれると期待できましたし、新しい妻も、前の妻が見込んだだけあって、長男のことを気遣ってくれていました。それでも、長男としては心に重いものがあつたのだらうと思います。

——14歳の少年にしては、よくできた子だったみたいだね。ボクなんかとはまるで違つと、いわずもがなのコメントを付けておくしかないね。

㊦ 私は息子に、

「私にしても正直に言って眉山を離れたくなかった。あの土地柄が自分に合っていて、そなたぐらいの年の頃には、山に入ったままそこで一生を終えたいと、真剣に考えていたほどだ。しかし、都でしなければならぬことが必ずあると、自分の小さな思いを断ち切って官員になり、今回もまた都に出て来た。それで都で何があったのか、それはそなたも見た通りだ。私はしなければならぬことを本当にしたのか、それは自分にはよくわからない。結果としては、いま私はこうしてこの船に乗っている。都でのことをそなたはどのように見たのか、それを聞かせてほしい」

「わたくしは、眉山にいたときに、もしもここで先祖からの家業を受け継いでい

たならと想像したことがありました。先祖は皆故郷で一生を終えたと聞いています。しかし、お祖父様もそのお兄様も、生涯の終わりは故郷ではない場所でした。母もです。それ以前の先祖は家業のために外に出ることがあっても、必ず故郷に帰って来ました。それをわたくしはひどく羨ましく思います。

都に来てから、わたくしは悪い予感が当たってしまったのではないかと、ずっとびくびくしていました。父上からはんぼう范滂について聞かされたとき（[第13回](#)）、まさしく最悪のことが起こってしまったのではないかと怯えました。わたくしは范滂のことを勉強しました。范滂の時代と今が似ているのか、違っているのか、わたくしにはよくわかりません。でも、都が恐ろしいところになりつつあるのは間違いないように思えました。そして、わたくしはきつと范滂にはなれないと思いましたが……申し訳ありません。正直に何もかも申し上げているのです」

私は息子が懸命に話すのを黙って聞いていました。

「わたくしは思いました。こういうことだから、眉山を出たくなかったのだと。

そして、同じ范姓はんでも范蠡はんれいの事績を読みました。ある日突然父上が先祖の家業にお戻りになると決心なさるのではないかと、決してあり得ないことを夢想しました。『さあ、眉山に帰ろう』とおっしゃるのを、わたくしは心待ちにしていたのです。

ごめんなさい。そんなことは絶対に絶対にありえないことです。本当に本当に正直に申し上げているのです」

息子は涙声になっていました。

私は嘆息し、

「そうか、そなたはそのように思っていたのか。

范蠡 はんれい む 三たび遷りて皆 うつ 栄名ありて、名を後世に垂れる。

私もそのようになればよいと、そなたは思ったのか」

「自分の怖さ、自分の弱さをまぎらわせたいがために勝手な空想です。いけない空想だとわかっておりました。打ち消そうとしました。だけど、どうしてもその空想へと心が向かってしまうのです」

私はすでに遠くに去った都の方角へと視線を送り、

蜚鳥 ひちよう 尽きて、良弓 りようきゆう は蔵せられ、狡兔 こうと 死して、走狗 そうく は烹 に られる。

と、つぶやき、馬正卿に、

「まだまだ子供と思っておったが、すでにいろいろなことを考えている。君は知っていたのかい。そうか、范蠡か。范蠡のようにありたいと思うのもよからうか。

しかし、宰相の地位を捨てて商人になった范蠡の真似を、私にとっては先祖の業に返るとはいえ、してよいものだろうか。君はどう思う」

「さようでございますなあ、郷里にお帰りになった5年前であれば、まだしもあり得ましたでしょうか。今はそれをなさつて、『栄名』を期待するのは難しかろうと思います」

「いつであれ『栄名』を求めるものではない。求めるのは、言葉は真実のものでなければならぬということだ。恥ずべきことに、ここ数カ月はそれに反していた。范蠡の後を追えば、逃げたと言われても仕方あるまい。これからは断じて曲

げはしない」

——あのお、そんなこわい顔でにらまないで……。ひどく盛りあがっているようなのですが、ボクには話が見えなくて……。えーと、范滂っていうのは、トーバ——君がお母さんから教わったって何度か聞いたので、そのあたりまでは理解できていたんだけど、范蠡とかいう人が出てきてからは、わからなくなってしまった。もしかして、それも前に聞いてたっけ？ 記憶の限りでは、なかったような……。やっぱ蘇東坡検定試験はせいぜい初級止まりだね。

㊦ 范蠡の名は実は前回出ています。それで説明なしで進めてしまったのですが、いまの話を理解していただくのは確かに無理だったでしょうね。范蠡のことはほ

んの少ししか説明していませんでしたから。

——少しでも説明があつたんだ。マジで覚えてないんだけど。

㊦ 前回、敵国と戦つてあと二つの町を占領すれば完全な勝利が得られるところ

まで迫りながら、果たすことができなかつた楽毅がくきという人についてお話しました。

楽毅が失敗したのは、下手に王道を用いようとしたからだ、私は制科の論文に書きました。そして、楽毅とは逆に思い切つた判断をして成功した例として、范蠡を挙げました。そこだけを繰り返しますと、

剛毅にして果敢にも迷わず事を成し遂げた者がいた。その一例が范蠡はんれいである。越えつの

国の王の勾踐こうせんは艱難辛苦の末に呉王の夫差ふさを破った。越王の軍に包囲された夫差は懸命に命乞いをし、越王は夫差を憐れに思い、赦してやろうとした。そのとき范蠡は、呉王の使者を追い帰して軍を進め、夫差を自殺に追い込み、将来の禍根を絶ち切った。

范蠡は情け容赦なく敵の王を死に追いやり、勝利を完璧で不動のものにしたので、こえつどうしゅう「呉越同舟」という言葉がありますように、中国の歴史において、呉と越は敵対するライバルの典型とされてきました。范蠡はそうしたライバル関係に終止符を打ったのです。

——ちよつぱり記憶がもどってきたかも。トバー君自身に関わらない歴史上の

話だったので、あんときは、たぶん、ホタテのバター焼きなんかを一生懸命に食べていて、いいかげんに聞き流しちゃったんだよなあ。今度から、食べているものと話を関係付けて覚えるようにしたらいいのかもね。それって、いい思い付きだと思わない？

㊦ 息子が言っていたのは、范蠡のその後の行動で、その話はまだしていません。

越王は呉国を破ると、他の国々対しても次々に軍事的成功を収め、いわゆる「覇者」となって絶頂期を迎えました。范蠡は、越王の性格からして、困難に共に立ち向かうことはできても、平和な時を共に過ごすのは難しいと考え、越の国を去り、斉の国せいに行きました。そこでは名を変え、土地を開拓して大きな財産を築き、その実績をもって斉王に宰相として迎えられました。しかし、長くその地位を保

つのは難しいと考え、そこでも職を辞し、手元の財産を人々に分け、また別の土地に行き、今度は商人になりました。そして、またしても莫大な財産を築き、そこで生涯を終えたのです。

范蠡はこうして三回とも成功し、「范蠡三たび遷りて皆采名ありて、名を後世に垂れる」と高く評価されたのでした。

——そういう人なんだ。トバー君を見ると、たぶん商売でも成功したんじゃないのかなあって、そんな気がする。改革に反対して聞き入れてもらえなかったんだから、范蠡と同じように商人に転身して自由に生きたっていいのに、ダメだというのはどういう理由からなの？

㊦ それにお答えするために、范蠡についてもう少しお話しておきます。

范蠡は越の国を去って斉の国に移った後で、越の国に残っているかつての同僚に手紙を送り、自分と同じように地位を捨てることを勧めました。その手紙に、

蜚鳥ひちよう尽きて、良弓蔵せられ、狡兔こうと死して、走狗そうく烹られる。

という当時の諺を引用しています。その意味は、「良い弓も鳥を取り尽くしてしまえば使われなくなり、猟犬も獲物となる兎がいなくなれば煮て食べられてしまう」、つまり、どれほど有能な人間でも、用がなくなれば見捨てられてしまうということです。范蠡は、越王はそういうことを平気でする人間だと見抜いて去ったのです。手紙を受け取った同輩も思うところがあり、病気を称して家に籠りました。

そして、反逆を企てていると讒言する者があつて、自殺を命じられてしまいました。まさしく獵犬は煮られたのです。

——へーえ、なかなか残忍だね。いまでも、どっか北のほうにある国では、獵犬を煮る人がいるみたいだけど。有能な獵犬ほど危険だと思ったりするんだろかね。

㊦ 范蠡は何のために同輩に手紙を送ったのでしょうか。同輩を救おうとしたと、范蠡は言うでしょう。しかし、結果としては、范蠡の手紙が同輩を死に追いやってしまったのではないのでしょうか。范蠡はただ自分の見識を誇りたかっただけなのではないでしょうか。

私は都に向かって「輩鳥尽きて云々」とつぶやきました。改革の旗印のもとに

俄かに集まった連中は、さぞかし真つ先に煮られてしまいうだろうという思いを籠めてのことでしたが、すぐにそのようにしたことが恥ずかしくなり、息子に向かつて、

ちやうけいうかい

「長頸烏喙とは誰のことであるのか」

「范蠡が越王のことをそのように譬え、『長頸烏喙』のもとからすぐに去ることを同輩に勧めました」

「人間を評して『長い頸くびに鳥の喙くちばし』とはどういうことであるのか。越王はまともな人間ではない、ダチヨウだとも言うのか。敵対する呉の国を亡ぼそうと、『長頸烏喙』と艱難辛苦を共にしたのは誰であったのか。そのときからすでに越王のことを『長頸烏喙』と思っていたのか。一体何のために『長頸烏喙』に仕えていたのか。そなたはどう思う」

「とにかく呉に勝ちたかったのでしょ」

「何のために勝ちたかったのか。越の王のためなのか、越の民のためなのか。范蠡はそのようなことは少しも思っていなかったに違いない。范蠡はいつもそのようなのだ。ただ単に自分の才覚を誇りたかったのだ」

私はそのとき、制科の論文で范蠡を称えたのを悔やみ、

「范蠡は己のためにひたすら『栄名』を求め、しつこく三回も成功してみせた。ただそれだけだ。『長頸鳥喙』とは他ならぬ范蠡自身ではないのか。」

我が先祖の業は尊い。以前なら喜んでその業に戻ったであろう。しかし、私は断じて范蠡のようにはならない。宋の国と民のためにならないと、私は改革を批判した。自分の才を誇り、栄名を得たいがために論じたのではない。私が真実の言葉だけを並べたのだと証明するためには、私は国と民に責任を最後まで負う官

員であり続けなければならない。そなたが正直に言ってくれたお蔭で、私の心ははつきりと定まった。礼を言う」

——ボクに向かって頭を下げなくても……。トーバー君も、ずいぶんと熱の入った話し方をするようになってきたみたい。かんだまつのじょう神田松之丞さんに弟子入りしたりした？ 若い講師で、すつごく熱く語るんだ。こないだ、とうとう叔父さんに付

き合つて寄席にいつてあげただけど、一番印象的だったのがその人だったんだ。

トーバー君の名調子と、立派な決心をしたということに、盃を挙げたいと思うんだけど。それで、いま聞いていてちよつと思つたのは、棺を持って郷里に帰つたときに商売をしたと告発されたことも、商人にはもどらないというのと少しは関係しているのかな？

Ⓣ 非改革派が改革に強く反対した論点の一つとして、利潤を巡って国家が民と争って力任せに奪い取るのは不道徳であるというのがありました。改革は経済活動のありとあらゆるところに介入して国の財政規模を拡大しようとするもので、民間の収益となるところのものを国が吸い上げてしまうという側面がありました。帝王は徳によって民を統治するというのが儒教の基本的な考え、つまり「王道」です。国家が利に敏く振る舞うのは「王道」に反する不道徳な統治方法です。そうした観点から改革を批判する側の一人として、利潤の追求を第一義とする商人に身を転じることはあり得ませんでした。

——ふーん。いろんな理屈があるんだね。ヨーロッパでは絶対君主が採用する政

策として重商主義というのがあったけど。

㊦ 宋の都を通り抜ける川として、五丈河ごじょうが、汴河べんが、蔡河さいがという三本の川があり、それらはいまの都心を貫通する幹線鉄道のような役割をしていました。旅の行き先に応じて川を選択し、杭州方面に行くときは最大の幹線運河である汴河を選ぶのが普通でした。私はそうでなく、竜津橋りゅうしんから蔡河の流れに乗りました。というのは蔡河を下った先に、弟が学校の教授を務める陳州ちんがあったからで、船の旅はまずは陳州を目指しました。都から陳州へは150キロほどです。それこそ鉄道を使えば半日ほどの行程です。

私の乗った船は官費で借り上げたもので、先日焼けてしまった光進丸のような立派な装備はもちろんありませんでしたけれど、大ききだけを比べればさほど見

劣りするものではなく、当時としてはそれなりに立派な船でありました。

船には、私と妻、2人の息子、ずっと古くからいる乳母、馬正卿の他に、遠縁の親族が4人乗りました。親族というのは、夫だけが杭州に単身赴任していて、この機会に夫のものに行きたいと、その妻と3人の子です。どれほど遠縁であっても親族は助け合うべきだというのが古い中国の基本的な理念で、まして私はお上からそれなりの禄をいただく身でありましたから、親族を支えるが義務のようなものでありました。

船には船頭や乗組員、私達の身の回りを世話する使用人なども乗っていましたから、実際にはなかなか手狭で、現在の客船のように1人ずつに個室があると、いうわけには無論いきませんでした。ただ私にだけは、狭いながらも専用の船室があり、そこで書物を読んだり、書き物をしたりして過ごすことができました。

その部屋の壁には、やはりお上の御用で旅をした誰かが詠んだらしい八首の詩が記してありました。詩としてはそれほど巧みなものではありませんでしたが、日々その詩を眺めているうちに触発されるものがあり、旅の折々にその詩と同じ韻を用いてやはり八首の詩を作りました。それを聞いていただくと、今回の旅がどのようなものであったのか、イメージをつかんでいただきやすいのではないかと思います。

もとの詩は全て五言絶句、つまり一句が五文字で、四句で一つの詩という、非常に短い形式の詩でした。私は五言絶句が得意ではなかったということ、言い訳のようにあらかじめ申し上げておきます。

船着き場の青い草の内で鳴く蛙、

川の合流点に垂れる柳の内で騒ぐ蝉、

そして偶然ここに居合わせた旅行く私、

新たに雨が通り過ぎる。

——ふん。言い訳とかいらなかったんじゃないの。あっさりとした、こういう詩なら、わかりやすいかも。カエルとセミと自分がいて、そこにさつと雨が降ってきて、「ああ、いまボクは、カエルやセミと同じように、ここにこうして生きるんだ」って感じるってことだよ。いつもと違って理屈っぽくなくていいように思う。

① それは果たして褒めていただいたことになるのでしょうか。

吾行亦偶然（吾が行もまた偶然なり）

これはそのときの実感でした。改革に反対したために都を去ることになったので、自分がそれを選んだとも言えるでしょうし、誰かによって余儀なくされたとも言えるでしょう。しかし、大きく見ればたまたまこの時代に自分が居合わせたからこのようになったのであって、それが偶然によるものであるのは、蛙や蟬が通り雨に降られるのと何ら変わらないのです。

——ふと思い出したんだけど、この前、ちょうど満開のときに、桜並木ところでスマホを見たまま歩いてるおっさんがいたんだ。それも並木の最初から最後まで

ずっとだよ。こっちも気になってずっと見てしまったんだけど。歩きスマホって、ボクもまったくしないわけではないんだけど、よりによってなんでいまここでするのかってこと。一回も桜をまともに見ないってヘンだよ。よっぽど大事ななんかあったのかもしないけどさあ、

偶然か必然か知らないけど、いまこのときこの場所に居合わせているってことに、なんにも関心が向かないっていうのはおかしいよね。ネットで世界とつながるっていうけど、目の前の世界とは断ち切られてるんだよなあ。

で、話がつながるかどうかわかんないけど、ここでジョン・クレアの詩を持ち出すと、

また春が訪れ、小さな約束の品をもってくる、

だから今も例年のとおり、私の子どもっぽい心は惑乱し、

またも腰を屈め、すみれの花を捜すのだ。生垣の下、

蔦つたのあいだ、そして枯れ果てた落ち葉のなかに。

.....

過ぎ去った年月にしたとおりに、今も私は、その昔

宝と思った花枝を求めて、藪のあいだをよじ登り、

花でいっぱいいっぱいの枝をたくさん、両手で抱え込む、

こうして私の心は過去を現在としてかき立てるように思われる、

あの頃の、妖精を思うような夢の、輝く陽射しこそ失せたものの。

(森松健介訳 97ページ)

あのさあ、生きてるって、ホントはこういうことなんだろうと思うんだ。季節の移ろいのなかで、なにか知れず「惑乱」するんだよ、きっと。そういう感覚を、大人の分別で忘れちゃったらいけないんだよ。桜が咲くと、人が浮かれたりするのって、つまり、こういうことなんじゃないのかなあ。

たまたまいま桜が咲いていて、そこにヒヨドリがきて花をついばみ、そこに自分が通りかかり、「過去を現在としてかき立てる」ような感覚が湧き上がって、それで生というものを実感する……そういうこと以上に大切なことが、いったいどこにあるんだろう？

Ⓣ 私の詩とジョン・クレアの詩に共通するものがあるのかどうか、あなたが自由を感じるのにお任せしたいと思います。

では、二首目です。

鳥が楽しむとき、獲り網があるのを忘れ、

魚が楽しむとき、釣り餌があるのを忘れる。

安らかにいられる場所はどこかと選ばなくても、

流転してやまぬ広大な天下には、ここというところがきつとある。

——ん？ これはわかるようでわかんないかも。鳥や魚が楽しんでる間にも、

実は網や餌がどこかに存在していて、それにひっかかってしまうかもしれないという潜在的な不安を暗示しているように、前半は聞こえたけど、それなのに、安らかにいられる場所があると、後半で言い切ってみせるのは矛盾してない？ 都

を追い出されたトーパー君としては、断言することで自分を鼓舞したかったってことかな。

㊦ 第一首と第二首は序奏で、第三首から以下は、朝、昼、夕方、夜と、時間を追って旅の一日を描写としたものとして聞いていただくことよろしいかと思えます。

炊事の煙が村から上り始め、

朝日が投げかける光はまだ弱々しい。

田園はどこも懐かしさを誘うのに、

どうして郷里に帰らずにいるのだろうか。

私の旅は速くもなく遅くもなく、

軽やかな權の動きにゆらりゆらりと進んで行く。

船が止まると村の市はにわか賑わい、

水門が開くと勢いづいた波が川にみなぎる。

船上の人間は炎熱に一日苦しめられ、

高い木々に囲まれた入り江に船を停泊させる。

空にはまだ月が上って来ないかわりに、

黒い雲が今にも崩れそうな形でそそり立っている。

地上の万の穴が一斉に共鳴するかのよう雷が轟き、

天上の池の水をまき散らすかのように風が吹き過ぎる。

雷と風の撃ち合う騒動は一瞬にして終わり、

天空に北斗と南斗がかかる。

——曆の上では秋でも、まだ暑さの盛りだったといってたけど、激しい夕立にも降られ、まったく夏の旅だったんだね。どれも旅情が感じられてわかりやすいかも。

㊦ センチメンタリズム
次は旅の感傷というものでありませんか。

ここはえいすい潁水であってかんすい漢水ではない、

しかし、水は同じく若い葡萄の実の色をしている。

もしも漢水であるのなら、我が故郷へと通じ、

子供等が懐かしい童謡を歌うのが聞こえて来るであろうに。

蔡河を下って陳州を通過し、さらに行くえいすいと潁水に合流します。潁水との合流点か

ら少し南に行くおうようしゅうと潁州があり、そこに歐陽脩が引退後の居を構えていました。欧

陽脩は何度もお話をしていますように、私達父子にとっての大恩人です。杭州に赴任するに当たって、ちょうどどうまい具合に弟のいる陳州と、歐陽脩のいる潁州に順に立ち寄ることのできるコースを選んだのでした。

潁水に入って、何やら故郷の四川に発する漢水と似るところがあると感じたのがいまの詩です。

——旅先で、初めてきた場所なのに、ふと、よく知っているところと、なんか似ているかもって、思ったりすることってあるよね。実際のところはゼンゼン違っているんだけど、自分の内にある古い感覚を呼び起こすようななにかがあったりするのかもね。

でも、「若い葡萄の実の色」って、実際にはどんな色の水なの？ ボクにはイメージがうまくわからないけど。トバー君も理屈だけはでない、詩的な表現もできる人だったんだね。

㊦ 次が一連の詩の結びです。

私のこの詩は拙いものであるけれど、

心が平らになるにつれて、調べは良く和すようになった。

年来の煩惱もいずれば尽き、

波の立たない古い井戸のようになるのであろうか。

——古い井戸ねえ。つまり、

古井戸やかわずもとばず絶無の音ね

つてなところかな。古池よりもずっと静かかってことなただけど。音がまったくし
ないと、実は静けさもわからないだろうけどね。



いまの詩の冒頭の二句を原文で示しますと、

我詩雖云拙（我が詩 拙と云うと雖も）

心平声韻和（心平らかなれば 声韻和す）

心が平穩になると、詩が巧みであるかどうかとは無関係に、詩の音楽的要素が調和に至るということです。そして、究極的には音の絶えた古井戸になるのです。旅を進めるうちに、そのようにことを思うに至ったというのが結びです。

——心の高ぶりをやむにやまれず吐き出すのも詩だし、心の静かなままに音律の

整ったことばを唱えるのも詩であつて、さらにはことばもなくなるってことかな。いまの8首の詩を聞いて、日常から離れる時間の長さって大事なんだなあつて、改めて感じた。新幹線か飛行機であつという間に新しい任地に着いてしまつたら、都での重い気分を心の中に置いたままになつてしまふものね。

㊦ この8首の詩で、旅はすでに潁州に至りましたが、話を陳州に戻しましょう。

我が弟の蘇轍そてつは熙寧2きねい（1069）年8月に朝廷から去ることを願ひ出て、その際に新法を激しく批判し、王安石おうあんせきを激怒させました。地方官となる辞令が出て、弟はすぐには赴任せず、門を閉ざして家に籠りました。翌年の1月、父のもう一人の大恩人である張方平ちやうほうへいがやはり改革派と対立して都を出て、陳州の知事になりました。張方平は陳州に着くと、すぐに弟を州の学校の教授として招いて下さり、

弟はそちらに行くことを選びました。そして陳州に着くとすぐに2首の詩を送つて来ました。その返しをしたいと思います、心が平らかになることがなく、1年半余り経って、いまお話ししている旅に出た後でようやく弟に詩を返すことができました。

まずは第一首です。周囲の空気を読むことなく、我が心の内をそのままに出すとこのような詩になります。

孔子の時代から遠く離れ、

道徳が失われて久しいとはいえ、

私は円熟した人々に出会うことができました。

その人達も、そして自分達も、もはや老い衰え、

いまさら實用の学に転じることもできない。

役立たずの独活うとの大木を決め込み、

この有り難い御代に阿呆の身を委ねるとしよう。

昔から、無名の貧乏人であればこそ、

生涯親から離れずに孝行できると言うのではないか。

己の暮らしこそを大切にして行きたいものだ。

——ん？ あのさあ、これってどういうこと？ 心の内をそのままって、最後の部分だけ聞くと、息子さんにいわれたこと、そのままだったりしない？ 役人なんかやってられないってことだね。実は息子さんに本心を見抜かれたってこと？ とにかく、矛盾するようないろいろな思いがあったということかな。

それで、「円熟した人々」っていうのは、歐陽脩とか張方平のような先輩のことだよね。スーパースターたちにあこがれて自分も政界に身を投じてみたけれど、いまやすっかり時代が変わって、理想を口にするのはどんくさい阿呆で、改革の流れに乗って実務的なことをテキパキこなすのが有能であると、そういうことになってしまつて、もう居場所がないってことだよ。これって、完璧な解釈だよ！ もしかして、ボクって、漢文で100点とれたかも。

で、「阿呆」って、漢語なの？ 原文はきつと違ふよね。

㊦ 「疎狂」^{そきやう}です。疎^{うと}くて頭がへんてこりんという意味です。

第二首は、

故郷と別れて三年、

山の松は生き生きと育っているだろうか。

故郷を思い続け、

その心はいつまでも変わらない。

時には、戸を閉ざして夢に故郷を尋ねもする。

行ってみると、我が愁いを語り合う相手はそこにはいない。

夢より醒めれば、

やはり、我が愁いを語り合う相手はいない。

流れる涙を添えて、

君がいる南の地へと送ろう。

——山の松ってというのは、トバー君が墓地に植えた松のことだよ。トバー君はいつもその松のことを思っているみたい。故郷の象徴なんだろうね。

都には語り合える相手はいない、一刻も早く弟に会いたいと、そういう詩だよ。ね。こうなると、船も速いほうがいいかも。

㊦ 陳州に到着したのは7月末、それから70日間ほどそこに滞在しました。それだけ長期にわたったのは二つの理由があります。第一は、正直言って弟と離れ難かったからです。第二は、張方平がまた別の土地に行くことになり、その見送りをしたかったからです。もつとも第二の理由は、第一の理由をオブラートに包み込むものであったのですが。

陳州でゆっくりしていたかったのは私一人だけではありませんでした。我が妻

も弟の妻との再会を心から望んでいました。私は故郷を発つ直前に妻を迎え、都に向かう旅の間に、我が妻は弟の妻から官員の妻としての心得を詳しく教わりました。それはもとはと言えば、私の前の妻が教えたことでありました。

弟夫婦は何と言ったらいいのでしょうか、はたで見えてほっこり心が和らぐような感じで、互いに敬愛し、互いに労わり、実に仲のよい夫婦でした。弟は直球しか投げない性格で、妻を大切にすると決めたからには、一生涯変わることもなくそれを貫き通しました。弟の妻は穏やかな性格で、弟の剛直なところを軟らかく上手に受け止めていました。私の新しい妻も穏やかでありましたから、弟の妻と2人でゆったり語り合うさまは実にほのぼのとしたものでありました。

弟にはこのとき3人の子がいて、上の2人が男で、それは私の長男よりも年少で、3人目は前の年に生まれたばかりの娘で、私の次男と同年でした。子供が5

人になれば一気に賑やかになるということは容易に想像できませんでしょう。

弟のもとには乳母の楊婆ようさんが、私のもとには乳母の任婆じんさんがいて、2人も我が母が嫁いで来たときに一緒に蘇の家に来た仲でしたから、やはり再会を待ち望んでいました。そして、馬正卿は第一家の全ての人から好かれていました。とりわけ2人の男の子は会うなり、私などはそっちのけで、馬正卿に駆け寄って飛びついたほどでした。

また、船の同乗していた親類親子は、万事控えめで、3人の子の一番下が私の長男とほぼ同じで、弟一家ともすぐになじみ、陳州での日々を楽しげに過ごしていました。夫の待つ杭州に早く行きたい気はあったでしょうけれど、暑くて狭い船に乗っているよりは、池のほとりにある弟の家の方が快適であったのは間違いないありません。

さて、陳州の船着き場に迎えに来てくれた弟と会って、最初にどのような会話を交わしたのか、ちよつと想像していただきましょうか。

——えーと、昔むかしのことだから、兄弟といえども、お兄さんがやっぱ偉くて、弟はごく丁寧なあいさつをしなければならなかったのかな？ それではクイズの答えとしてはつまらないから、「しばらく見ないうちに、たいそう色がお黒くなりました」とかいったのかな？ これって、このあいだ寄席で聞いたセリフなんだけど。「色がお黒くなりました」というのはお世辞らしいね。それだけよく働いているってことば。



ほぼ正解です。まだまだ暑い時期に船で旅をすれば、自ずと日に焼けます。

顔色もよく精悍な風貌になったと、弟は嬉しそうに言ってくれました。精神的にも解放されて、快活さが戻っていたのでしよう。

私は、

「君はまた背が伸びたようだね」

と言って、わざと屈んで弟を下から見上げました。

「まさか、三十を過ぎていまさら伸びるはずがありません」

「気持ち伸びやかになると、それがきつと背丈にも反映するのだろう。ここらえんきやうに宛邱えんきやうという丘があると聞くが、君はまるで丘のように見上げるばかりだ。これからは君を宛邱先生と呼ぶとしようかな」

という訳で、その後、私は弟をしばしば宛邱先生と呼ぶようになりました。

弟が教授を務める学校は、陳州の町の北側にある柳湖りゅうこという池のほとりに建ち、

弟の家もそのすぐ近くにありました。柳湖はその名の通り、池を巡って柳が植えられ、その数1万株とも言われていました。

その柳湖の風光を詠んだ弟の詩に和した詩を聞いていただきましょうか。弟は、池の柳と山の松を比べて、風に靡きやすい柳よりも、どっしりと構えて動かない松を堅固であると、詩の中で褒めていました。それで、私は少し違った見方を出してみました。

思えば昔、杜甫が夔州とほ きしゅうの東の村にいたとき、

茅葺のちっぼけな家は青い山の下にあった。

杜甫は詩を詠み過ぎて辺境の地をさすらう身となり、

猿や鳥と愁いの声を競ったのだった。

君もまた都の人から棄てられてしまい、

いつも独りぼっちで馬に乗って歩み、

柳湖の一万株の柳だけが、

朝に夕に、君のために清らかな蔭を作って待っていてくれている。

そうであるのに、

柳に対して酷な評価をしたのでは、

柳もがっかりして元気に繁ることができないだろう。

柳は口がきけないし、怒ることも知らないけど、

君の言い方では世間の人々だってがっかりするだろう。

春の柳の光り輝くさまは、

女性のあでやかな姿の譬えによく用いられる。

ねじ曲がった松の根が、

空腹に苦しむ蛇に譬えられるのとは大きな違いだ。

朝には、柳の葉の緑の蔭は、炎天下の松の蔭より濃いものがあるし、夜には、柳の枝には、松の枝には見られない揺れる月の光がある。

春には、花が風に乗って雪のように翻り、

秋には、啄木鳥きつつきの虫を啄む音ついでばが高く鳴り響く。

四季によって、繁っては落ち、繁っては落ち、

寒さにつけ暑さにつけ、盛衰の異なる姿を見せてくれる。

山の松は、積雪に埋もれようとも凍え死ぬことなく、

常に同じ緑を保っている。

だからと言って、

柳と松とどちらかがより賢いということはないのではないかい。

——やっぱ、理屈っぽいいつものトバー君だね。

さっきの詩でも松を詠んでいたけど、松ってどういうイメージなんだろう？
推測するに、弟さんは、雪に埋もれても緑のままに松のように、自分の信念を曲げずにいたいと、そんな感じのことを詩に詠んだんだろうね。直球勝負の弟さんらしく、断固として負けないぞというわけで。それに対して、トバー君は、風になびく柳もまたよいではないかと詠んだんだよね。それはさっきの「心が平らか」というのと通じているのかも。

① いまの詩で、最初に杜甫に言及し、それが後半の部分とどう関係するのか、

あなたにはたぶん見えにくかったと思います。これには少々の伏線があります。

張方平は陳州に赴任して以来、考えるところがあつて、杜甫の詩を熱心に読んでいました。私が来てからは弟と3人で、よく杜甫を論じ合いました。

杜甫は一時期唐の皇帝の近くに仕えていましたが、朝廷の人々と合わないところがあつて、自ら職を辞してさすらいの身の上となりました。そのことを「杜甫は詩を詠み過ぎて」と表現しました。杜甫に私達の境遇を重ねているということはおざかりに思われます。杜甫は各地を転々とし、夔州きに来た頃に、その詩は悲壯感を極めました。まさに雪に埋もれる松のようでありました。私は杜甫を深く尊敬しつつ、しかし、弟にそこまで徹底しなくてもいいのではないかと、敢えて軟弱なアドバイスをしたのです。

——直球勝負の弟さんも、たまには変化球があつてもいいってことかな。

㊦ 張方平は杜甫の詩を読んでの感想を詩に詠み、私と弟はそれに和して詩を作りました。私の詩を聞いていただきましょう。

古代の詩の輝きが薄れると、

詩の流れは横暴な君主達にねじ曲げられ、

宮廷詩人が媚びた賦ふを作る一方で、

中央から放逐された屈原くつげんが新しい詩の形式を創った。

それからさらに詩は変転し、

崩れもし壊れもし、

たくさんの俊英が現れもした。

辺鄙な土地に奇怪な物産が出現するように、

源流から離れたところで詩は狂乱の態を呈した。

厚化粧が真の美しさを凌駕するかのように惑わせ、

神に供える神聖な豚や羊よりも生臭い魚や蝦えびが大切にされたりもした。

今では誰もが知るように、

杜甫が現れ出て、

その名は李白りはくと共に高く並び、

大地はきれいに掃き清められ、

ただ二人の足跡だけが並ぶのを見るようになった。

詩を作る者は追いつめられて苦しむのが常で、

天の意志がそうさせるのだ。

唐の天下が暗い塵に覆われ、平和が崩れ去ったとき、

皇帝は暴れる化け物を切つて捨てようと、

勇猛な武将だけを求め、

文に優れた者は顧みられなかった。

李白も杜甫も失意に沈んで遠く辺境の地をさまよひ、

その悲しみの声が遠く万里の彼方に聞かれた。

李白は鯨にまたがって大海の向こうに行こうとし、

杜甫は虎にまたがって大地の向こうに行こうとした。

杜甫の大いなる筆は竜をも退治するものだったのだが、

官に就いたときにはしがない厩番うまやほどの役しか与えられず、

世知に疎いために、手にした物は何もなく、

あるとき久し振りに大いに酔った日に亡くなったのだった。

今では杜甫の詩を手本とすべしと見られているが、

児童は単にそれをなぞる努力をするだけである。

現代の詩文において、

先頭に立って旗を振る者は誰であろうか。

他ならぬ張方平殿である。

張方平殿は杜甫の詩巻を開いて遙かに思いを馳せ、

会って語り合えないのを残念に思っている。

人は響き合う友を得ることを願い、

共に自在に才能を飛翔させるとき、

この天下も狭いと感じるのである。

残念ながら、私には張方平殿に見ただけのような佳句はない。

たまたま重陽の節句を前にしてお酒を頂戴したので、

菊の花を丁寧^{ていねい}に世話し、

草の中に埋没^{まいぼく}させてしまわないようにしたいと思うだけだ。

重陽の節句とは9月9日、菊の節句とも言われ、菊の花びらを浮かべた酒を酌み交わして長寿を願ったりしました。そこで、詩の最後に菊の花を持ち出して、李白や杜甫の精神を受け継ぐ詩の象徴として用い、雑草の中に埋もれさせないと詠んだのです。詩の意図をこうしていちいち解説するようではいけませんですね。

——全体としては、恩人の張方平を励ましたってことなのかなあ。それより、ゴマをすつてるような印象のほうが強かったんだけど……。

㊦ 張方平は、改革にはつきりと反対でありながら、州知事としては中央からの指令に従って新法を運用していかなければならないという矛盾に苦しみ、実務と直接関わらない閑職を求め、それを許されて別の土地に移って行くことになりました。その胸の内はかなり苦々しいものがあつたと推測され、私は断然偉大な先輩の後に従って行くと言ったのがいまの詩です。

次は、張方平が陳州を発つたときの送別の詩です。

我が公は古の仙伯いじえ せんはくの生まれ変わりであり、

世俗から超然と抜きん出た姿は羨門せんもんと変わらない。

急いで説明を付け加えますと、ここで「我が公」とは張方平のこと。「仙伯」とは仙界における伯爵で、「羨門」とは太古の時代の仙人の名前です。ここは過剰なまでの「ゴマすり」ですから、張方平も笑って聞き流すしかないというところです。

ところが、たまたま世間を救おうなどという志を抱いたために、俗世に繋ぎとめられることになってしまった。

譬えてみれば、竜が皇帝の御苑に遊びに来たようなもの、鳳凰が皇城の儀式に参列したようなもので、

いつまでもせせこましいところに留まっているはずもなく、

いずれは遙かなる仙界に帰るのである。

我が公は皇居に出入りすること四十年に及び、

ただの一度も自身の憂患を口にするとはなかった。

そして、「ふと「帰ろう」と漏らしたならば、

朝廷を挙げて引き止めようとしても無駄なのだった。

我が君はまことに叡智に溢れ、

草の根を払って有用の士を探し求めておられる。

昔の君主は、

誠意をもって応じる人が傍らにいなければ、

佳よき人を朝廷に引きとめておくことはできないのを、

よく知っていた。

我が公は、「帰ろう」と漏らすと、

すぐに居室をきれいに掃除し、

そこには何もなくなつて、日光が差し込むだけであるのを喜んだ。

こうして、我が公は、

万物が生まれ出る以前のところで遊ぶ境地に至つたのだが、

世俗の人はそのようなことは理解できない。

私もまた世渡り術に疎く、

世間においてぐずぐずするうちに、

鬢に白髪が出るようになってしまった。

出処進退などはまことにちまちましたことだ。

いずれ我が公の後を追うときが来るであらう。

——途中で、皇帝を批判しちやつてるみたいだけど……。都から離れて、自由なものがいえるようになったってことなんだね。

㊦ 張方平のもとでなら、何を言っても大丈夫であるとの安心感がありました。陳州の学校には、弟の他にも張方平がこれとは見込んだ人物が教授として招かれていて、皆が自由のものを言い合える雰囲気は確保されていました。それもまた陳州を離れ難くさせる一因でありました。

張方平を見送るよりも1カ月ほど前の8月10日の晩に、私と弟と、さいと崔度とという学校の教授と3人で、月光のもとで酒を飲みつつ、様々なことを語り合いました。はつきりと日付まで覚えているのは、それからちようど1年後の8月10日

にこの夜のことを回顧した詩があるからです。

笑ってしまうのは、

宛邱先生は凝り性で、いくら深く学んでも決して満足しないこと。

さらに笑ってしまうのは、

崔先生が貪欲過ぎて、百の学問の全てを究めようとしていること。

去年の今日は、

夕方にふらりと立ち寄ってから、

柏の木の彼方に冬の星座が昇り来るまで、

三人で過ぎこしたのだった。

宛邱先生は山盛りにした豌豆えんどうをぼりぼり食べ続け、

崔先生は恐ろしく赤い色の酒をぐびぐび傾け続けた。

今年もまた去年と同じ月を見て、

二人の先生は露の冷ややかさに感じ入っていようかと、

遙かに思いを寄せる。

笑ってしまうのは、

この春、崔先生は着物を質に入れて、

豆を植えてみたものの、

長雨のためにごっそり蛙が出て来ただけだったということ。

さらに笑ってしまうのは、

宛邱先生の家は壁があるだけの虫けら小屋同然のものなので、

どうどう身体を悪くしてしまい、

おうこう

王江先生とかいう道人に呼吸法を教わって治したことだ。

王江先生といえは陳州で知らぬ者のない大酒飲みであるのだから、どうせなら終日酔っ払っている法を深く学んだ方がいいだろうに。

この詩を添えて陳州に手紙を送ったのでした。

——詩にはこういうのもありなのかあ。ちよっとおもしろいかも。気心の知れた相手だから、からかうようなこんな詩も作れたってことだね。

それで、呼吸法で病気を治したってというのはホントのこと？

① 後にそれを弟から教わり、自分なりにいろいろ工夫を加え、その一部をアレ

ンジしたのがサーフィンの準備体操で行っている例のヤツです。

——そうなんだ。だったら、ボクも終日酔っ払っている方法を習うほうがいいのかも。

㊦ 陳州では他にもいろいろな人との交流がありました。いくつか詩を聞いていただきましょう。

ある人が、あるところに別荘を建て、引退後にはそこで悠々自適の暮らしをするつもりであると、その計画について得々と語るのを聞いての詩。

私もしがない役人仲間の一人として、

やはり田園の暮らしに興味を持っている。

いざ老いて身を引くときになって、

どこに廬いかりを結んだらよかろうかと初めて慌てふためいても、

植えた木が立派な蔭を作るには十年どころではないし、

そもそも買い求めるための資金もないということになってしまふに違いない。

先生は、清らかな川の流れに臨む地がよいとの占いを得てより、

すでに高い木々が画のような景観を作っているという。

隣近所の人々も竹を愛しているとのことだから、

春ともなれば、

さぞかしおいしい筍がわんさと出て来るであらう。

——最後は、もしかして、ちよつとからかったのかな？ 竹については、高潔な人がそれを愛するってことを、前に聞かせてもらったよね。だから、そういう風雅な心に賛意を寄せる結びになるかとみせかけて、花より団子、筍の実利をいって、笑えるオチを取ったってことなのかな。

ほら、ちよつど、メニューに朝どれ筍ってあるから、ボクも花より団子、焼いて食べない？ しかも地元産だよ。ちよつと高いけど、この時期しかないから、注文しちゃうね。

㊦ 実を言うと、あなたがそのように受け止めて下さることを期待して、原詩とはいささか異なる訳し方をしました。

原詩の結びは「春の来るとき、近隣の人とともに竹の若い芽をいたわり育てる

であろう」ということで、おいしい筍を食べるといふような意味合いはではありませんでした。それを敢えて変えたのは、この人がさも自慢げに自分の風流趣味を語ったので、ややうんざりした気分でのこの詩を詠んだのを思い出したからです。「あなたは用意周到にも隠居場所を用意していますが、私は官員としての任務に忙しくてそういうことにまで気が回りません」と、そういうニュアンスはほんのり匂わしたものの、都での日々の延長として、大人としての言葉の選び方をして、皮肉な言い回しは避けました。本来ならこう詠んだはずというところ、今夜は再現してみたのです。

しかし、相手はなかなか敏感で、何かを感じ取ったのか、この後この人とは次第に疎遠になり、ついには政敵となって私を激しく攻撃して来るまでになりました。ですから、今夜の訳の方が将来の伏線としてはわかりやすいのかも知れま

せん。

——へーえ、いろいろあるんだね。うっかりしたことはいえないなあ。ボクなんかも、ふだんはもう少し抑えてしゃべってるつもりではいるけれど、それでもまづいよなあつてことをいってしまってるみたい……。気をつけないとって思うんだけど、やっぱまたやってしまうんだ。

㊦ なお、隠居場所を準備しておくこと自体は少しも悪いことではありません。この後で訪ねた欧陽脩にしても、潁州にあらかじめ引退後の住まいを用意していましたし、スーパースターの富弼ふひつを始めとして高官経験者の多くは、洛陽に隠居後の住まいを作っておくということしていました。洛陽は長い歴史のある町で、

日本でいうと奈良のような感じでしょうか。富弼もしばこ司馬光も、改革に反対して政界を去った多数の人々が洛陽に集まったために、洛陽だけは改革派が肩身の狭い思いをしなければならぬということになりました。

さて次は、ある人が旅の途中で手持ちの食糧が絶えて難儀しているというので、皆で援助して送り出しときの詩。

天帝は、

多才である貴公の真価を十分に試そうと、

激しい風雨の真つ暗闇の中を旅させているのだろう。

貴公は、

一羽の鶏が鳴けば、自分も合わせて鳴くようなことはしない。

それがために、

「なんとまあ米櫃がからっぽじゃわい」と、

飯炊き婆さんを驚かせる始末となった。

杜甫という人は、

つんつるてんの着物はいくら引っ張っても膝まで来ないと詩に詠んだ。

がんしんけい
顔真卿と言う人は、

家計に無頓着で、数カ月にわたり一家で薄い粥を啜っていると書いた。

苦勞を嘗め尽くしてこそ詩人の情味は深くなるものだ。

それでお尋ねするけれど、

貴公はいまどれくらいまで嘗めたのかな。

——最後の句は、君の苦勞もまだまだかもねってということ？ またしてもからかい？ じゃあ、そういうあんたのほうはどうなんだよって、怒ったりしなかった？ それで、やっぱり政敵をまた1人増やしたって話？

㊦ この詩の場合は、相手との信頼関係があるとの確信があり、だからこそ、杜甫や顔真卿のような尊敬すべき第一級の人物を例に引いたのです。杜甫については先程述べましたし、顔真卿は、書の達人で、安祿山あんろくざんの乱のときに勇氣ある行動をしたといったことは、これまでにお話しています。

そして、「あんたはどうなんだ」という当然の反応に対しては、もう一首詠んでいます。

私のごときは、自分で自分に愛想が尽きる。

貴公の他には、誰も羨もひっかけてくれない。

青い灯のもとで夜深くまで貴公と語り続け、

書物の読み方が出鱈目のまま、

年齢だけを重ねて来てしまったことに悲しみを覚える。

若い頃はそうじ莊子の哲学にのめり込んだのに、

世を救おうなどとしがない官員になってしまった。

今は南に行く旅の途中で、

向こうで何をするのかと言ったら、

一万の太鼓を轟かすような、

潮が遡って来る際の音を聞くだけであるのだろうか。

私が8歳で最初に通った学校は道教の寺院の中にあり、その頃から老子や莊子の哲学を聞きかじり、山に住む隱者になりたいと思つたこともありました。そしてどこでどう間違つたのか官員となり、いまは杭州に向かつていて、詩の終わりの部分で、せんとうこう 錢塘江の海嘯かいしやうについて言っています。

海嘯とは満潮の時に潮が河口から勢いよく遡る現象で、杭州の近くの錢塘江では、秋の大潮には特に激しく潮が逆流し、その壯觀を見ようと昔も今もたくさん見物人を集めています。You Tube で「錢塘江海嘯」で検索すれば、いくつもの映像を見ることができるとでしょう。杭州に行つて私がすることと言えば海嘯見物くらいだろうと、自虐的に言つたのです。

次は、私が陳州にいる間に亡くなった人について詠んだ詩です。嚴密に言うと、

実際に訃報に接したのは陳州を離れた後でしたけれど。

それは陸誥りくしんという人で、我が故郷の四川しせんの中心都市である成都せいとの知事として、新法の弊害を訴え続けている最中に亡くなったのでした。

陸先生の真つ直ぐな節義は衆に抜きん出て、

峨眉山がびさんよりも高く聳え立っていた。

正しい道を行うことだけを考え、

自分のためになどということとはなかったから、

亡くなったときには家にわずかな蓄えさえなかった。

四川を行き交う人々は、

陸先生が亡くなったのを皆悲しんだと言う。

思えば陸先生とは、

都で塵降る中でお見送りしてから三年になる。

陸先生の遺像は成都の思賢閣に飾られるであろうから、

鳳翔で樽酒を酌んで旧交を温め直したことがあるように、

何十年後かにはきつとそこでまたお会いして、

私は涙で手巾ハンケチを濡らすに相違ない。

成都に思賢閣という建物があり、土地の偉人の肖像を飾っていました。いわば四川のために尽力した人の殿堂入りを陸誥も果たすに違いないということです。

こうして陳州で2カ月以上を過ごし、私は次の経由地である潁州に向かいました。前に言いました通り、潁州にはスーパースターの歐陽脩が引退後の居

を構えていて、お会いできる願ってもない機会であったのですが、弟も「是非自分も」と、船に乗り込んで来ました。

——ん？ どうかした？ 箸もグラスも置いて、急にしゃきつとして……。

㊦ 欧陽脩について、これまでもしばしばお話してまいりました。ここで改めて、どのような人であったのか、少しまとめて語っておきたいと思います。

欧陽脩は、個人的には大恩人であり、宋代の士大夫したいふにとっては一つの典型を示して下さった方でありましたから、いくらでも語りたいたい思いがあります。とは言え、あまり長くなつてはあなたにとつて嬉しくありませんでしょうから、欧陽脩が自身について書いた三つの文章を聞いていただくに留めておきましょう。

——えーと、好きなように好きなだけ語ってくれちゃって構わないんだけど。だって、「游たびの奇絶」を聞かせてほしいと頼んでからそろそろ2年、もう十分に長く語ってくれちゃってるわけで、ここで遠慮してちよつとぐらいはしよつてくれてもあんまし意味ないと思うよ。

それから、大昔のことについて詳しく知ったところでなんのトクにもならない……というようなありふれたことは、このごろボクはあんまし思わなくなったみたい。「片隅」の映画の話をしたよね。ボクらはみんな「片隅」で生きてるんだよ。「片隅」のホントにちっぽけな暮らしこそが、ボクらにとってはかけがえのないものなんだよ。大昔の人だつてきつとおんなじ。トバー君の話の聞き続けてきて、それが「真ん中」を生きてると錯覚してるような、いわゆる英雄の物語だつ

たりしたら、たぶんもうとつくに飽きてると思うんだけど、大昔の人のことも単なるお話ではなく、ボクらと同じように現実の世界を生きていたんだなあと感じられるようになったみたい。かといって、すべてに興味をもつのは無理だし、いろいろ聞いてもすぐに忘れてしまうんだけど、トバー君が話したいと思うことなら、ボクとしてはそれなりにまじめに聞くようにする気にいるんだ。

㊦ 二つの文章の第一は、歐陽脩の父の墓に通じる道に建てた碑に刻んだ文章です。それは「嗚呼！」という感嘆詞から始まります。欧陽脩は「嗚呼！」を好んで用い、一名『嗚呼史』と呼ばれる歴史書も作っています。それは、宋朝の一つ前の時代である五代ごたいの歴史を、欧陽脩が独力でまとめた『新五代史』で、随所に置かれた史論は全て「嗚呼！」から始まっています。

では、聞いて下さい。

嗚呼！^{あ あ} 我が父が瀧岡^{そうこう}に葬られてより六十年が経ち、その子である脩^{しゅう}はようやく墓道に建てる碑のための文章を書くことになった。敢えて遅くしたのではない。それだけの歳月が必要だったのだ。

脩^{わたくし}は不幸にも四歳で父を喪った。母は節^{せつ}を守ると自身に誓い、貧窮にあっても自力で衣食を得、子を育て、子を教え、大人にしようとした。

母は脩^{わたくし}に言った。

「そなたの父は、官吏として清廉で、人に施すことを好まれ、客を招くのを喜びとしておられました。俸禄は薄くても、いつも余さず使ってしまった、『お金のことで煩わしい思いをしたくない』とおっしゃっていました。そのため、亡くなった後には、暮らしを

守ってくれる一枚の瓦の覆いも、一畝はの畑もありませんでした。それで一体何をたのしみとして私が節を守ったかという、そなたの父から知ることがあって、それによってそなたが成長するのを待てばよいと考えることができたからです。私がこの家に嫁いだとき、お姑様はすでに亡くなっていて、お仕えすることはできませんでしたが、そなたの父がよくその母に孝養を尽くされていたのを知ることができました。そなたの父が亡くなったときにそなたはまだ幼く、そなたがきちんとした人間に必ずなるものかどうか、そなたを見るだけはわかりませんでした。それでも、そなたの父を見ておりましたので、きっと立派な後継ぎがあるはずだと知ることができました。

私がこの家に嫁いだときには、そなたの父は母のための服喪の期間を終えてから一年が経っていました。それでも、季節ごとの祭祀には必ず泣き、『墓前にいくら豊かに供えたところで、貧窮の中にあってもわすかなもので親を養うことには及ばない』とおっしゃ

つていました。酒食を召しあがると、時にやはり泣いて、『昔はいつも足りないばかりで、今は余るばかりにある。どうして昔が今のようではなかったのか』とおっしゃっていました。私はこうしたことを初めて見たときには、喪を終えたばかりであるから、まだまだこのようになさっているのだろうと思いました。しかし、その後もずっとそのままで、亡くなるまでこのようではなかったことはありませんでした。私はお姑様にお仕えするには間に合いませんでしたが、そなたの父がよく孝養なさったことをこうして知ったのです。

そなたの父は官吏として、いつも夜は燭を灯して公文書をご覧になっていました。しばしば文書を置いては嘆息され、私がお尋ねすると、おっしゃいますには、『この者は死罪になった。私は生かしてやろうとするけれども、きっとできないだろう』。『そうとわかっていても生かしてやろうとなさるのですか』。『生かしてやろうとした上でそれが

できなかつたのなら、死んだ者と私との間に恨みは残らないだろう。もしも生かしてやれたなら、それに越したことはない。方に一つの可能性があつて、生かそうとしないでいたら、死んだ者との間にきつと恨みが残つてしまう。常に生かしてやろうとしても、なお死なせてしまう。しかし、世の中の官吏にはいつも容赦なく死なせてしまう者がいるのだ』。そして、傍らに子守が立って抱いているそなたの方を顧みて嘆息し、『占いの者が、私の年回りからすると、戌いぬの歳に私は死ぬと言っていた。それが正しいのなら、この子が成長した姿を私は見られないだろう。だから、私が日頃言うことをこれに伝えてほしい』とおっしゃいました。そなたの父は、他所の子に教える際にも、いつもやはりそのようなおっしゃいました。私の耳にそのお声がはつきりと残つていて、詳細に覚えています。そなたの父が外でどのようなことをなさつたのか私は知ることはできませんでしたが、家にいらつしやるときには、一切飾り気がなく、真に心の底から発するこ

とをそのままになさっていました。ああ、そのお心は仁に厚いお方であったのです。それで、そのような父の後には立派な後継ぎがあると知ったのです。そなたはそうなるよう勉強しなければなりません。

孝養は豊かである必要はなく、肝要なのは孝の心です。物質的にたくさんを得る必要はなく、肝要なのは仁において厚いことです。私がそなたを教えるではありません。そなたの父の志を伝えるのです」。

脩は泣き、教えられた通りを心に志し、決して忘れることはなかった。

我が父も幼くして父を亡くし、勉学に勤め、咸平三（1000）年に進士に及第し、道州の判官となり、泗州、綿州の推官を経て、泰州の判官となって、五十九歳で亡くなり、沙溪の瀧岡に葬られた。

我が母は、姓は鄭、名は徳儀、代々江南の名族であった。恭儉、仁愛にして、身に礼を

具えていた。お上より福昌ふくしょう県の太君たいくんに封ほうぜられ、進んで楽案らくあん、安康あんこう、彭城ほうじょうの三郡の太君に封ぜられた。

ここで、説明をちよつと加えますと、「福昌県の太君に封ぜられた」とあるのは、子が高い位に昇ったことによつて、「福昌県を領地とする母」という称号を与えられたということです。実際に福昌県という土地を得たわけではなく、あくまでも称号です。県の太君から郡の太君に進んだとあるのは、日本の行政区分と違つて、県より郡の方がより大きなくくりだったからです。

欧陽脩の母は「貧窮にあつても自力で衣食を得、子を育て、子を教え、大人にしよう」と決心し、それにはかなりの苦勞があつたようです。母と欧陽脩とその妹は、同じく役人をしていた叔父のもとに引き取られたのですが、叔父には余裕

がなかったせいか、冷淡な扱いを受けたようです。母は「子を教え」るために、草の茎で地面に字を書き、書物を買うことなどは無論できないので、欧陽脩は常に人に借りて写し、あるときある物持ちからぼろぼろの古本をもらって瞥えようのない喜びを感じたのでした。こうして苦学の末に、24歳で科挙に合格し、官職に就いて自立しました。

わたし脩が若く位が低かった頃から、我が母は家を治めるのに儉約に努め、その後も常に脩がそれを超えないようにさせ、「我が子よ、もしも世と合わなかったときのために」わたしす。儉約こそは患難への備えなのです」とおっしゃっていた。実際に脩が夷陵いりやうに左遷となったときには、我が母は普段と変わらずに笑って、「そなたの家はもとより貧乏なのです。私はもともとそうしたところにいました。そなたが貧乏であっても安んじてい

るのなら、私も安んじていられます」とおっしゃいました。

また説明を加えますと、夷陵に左遷とは、欧陽脩が29歳のときのことです。「手本は范仲淹^{はんちゆうえん}」の范仲淹が当時の宰相を激しく批判して都から追い出されるということがあり、欧陽脩はそれとは何ら関わりがなかったのに、敢えて范仲淹の弁護を買って出たために、やはり都から追い出されたのでした。

欧陽脩が夷陵で住まいとしていた至喜堂^{しきどう}を、私は都に向かう旅の途中で訪ねていて、そのことは以前にお話しています **（📖 第4回）**。

——えっ、そうだったっけ？ まずいなあ、ゼンゼン覚えてない。これじゃあ検定初級もあやしいかも。



お話してから2年近く経ちましたから、無理もありませんでしょう。私は至喜堂でこのような詩を詠みました。

夷陵は長江の中流域に位置することから、

その昔は、戦略的に重要な場所とされた。

平和な時代になると、

この地から英雄が出るということはなくなり、

地方の小さな県というだけになった。

そこにひよんなことから、

文学上の勇者が都から流されてきて、

このあたりを歩いては詩を詠み文章を書いたので、

一躍、夷陵の名がまた高められた。

その人がここを去ってから幾年もが経ち、

その人が住んでいた至喜堂がややもすると傾いてしまうのを、

土地の人は毎年きちんきちんと修繕している。

その人が植えた橘は霜にあたって枯れたけれど、

その人が植えた楠は大きく立派になっている。

土地の人は私たちに尋ねた。

「うちの長官様はもう髪がまっしろでしようなあ」

「ええ、ええ、その通りですとも。」

何しろ自分の楽しみなど少しもなしに、

国のために年がら年中頭を悩ませて文章を作っておられるのですから、
というわけで、土地に人に代わって、

先生に遠く言葉を寄せさせていただきます。

「たまにはゆったりなさって、

お酒でも召しあがるのがよろしいのではありませんか」

——嗚呼！ 聞いたような気がしてきた。その「文学上の勇者」が欧陽脩ってことだよね。ある程度、欧陽脩について知ったいまになって聞くと、大先生に向かって若者がちよつとやんちゃな挨拶をしたってことがわかってくるね。

Ⓣ では、欧陽脩の文章の続きです。

我が父が亡くなって二十年にして脩は初めて祿を得て我が母を養えるようになり、
 それから十二年で朝廷に並ぶようになり、また十年で童^{リゅうどかくちよくがくし}閣直学士、尚書吏部郎^{しやうしゆしよりりぶらう}
 中^{ちゆう}、南京留守になつた。そのときに我が母は病氣のために官舎において亡くなつた。享
 年七十二歳だつた。それから八年で、脩は非才ながらも副枢密となり、ついには参^{さん}
 知政事となつた。さらに七年で官を辞した。こうして枢密院と中書省の二府に昇り、
 皇帝の御恩によつて、三世に亘る榮譽を頂戴した。

また説明を加えます。欧陽脩が就いた官職がここに並べられていますが、副枢密
 と参知政事は中央政府の要職です。副枢密は軍事を司る枢密院の副長官、参知政
 事は行政・立法を司る中書省の副長官、つまり副宰相です。そうした高い位に昇

ったことで、曾祖父の代にまで遡って名譽ある称号が皇帝から贈られたというのが「三世に亘る榮譽」の意味です。以下に、その称号を列挙します。一応聞いてみてください。

嘉祐年間以来、国に大きなお祝い事があると必ず榮譽を加えて下さり、曾祖父は金

紫しこうろくたいふ光禄大夫、太師たいし、中書令ちゆうしやうしよれい

紫光禄大夫、太師、中書令を順次賜り、曾祖母は楚国太夫人そこくたいふじんまで賜り、祖父は金紫

光禄大夫、太師、中書令兼尚書令まで賜り、祖父は呉国太夫人ごこくまで賜り、父は金紫

光禄大夫、太師、中書令兼尚書令まで賜り、母は越国太夫人えつこくまで賜った。今上陛下が

即位されて初めて天をお祭りした際には、父は爵号を賜って崇国公すうこくこうとなり、母は魏

国太夫人こくを賜った。

国太夫人を賜った。

——ずらずら並べて、これって、思いっきり自慢ってことなのかな？ お父さんのお墓に建てる碑に刻む文章だから、自慢するのが当然なんだろうね。

㊦ 親孝行は全てに優先すると何度も申し上げました。古い中国においては、家の高い位に昇るのは大変な親孝行であると、考えられていました。そして、皇帝から曾祖父にまで遡って名誉称号を与えられたのは、さらなる親孝行であったのです。欧陽脩は母から孝について教えられ、それを十分に果たした証としてこのように記しているのです。

ここにおいて脩は泣きつつ次のように言う。
わたくし

「嗚呼！ 善を為せばその報がないことはありません。しかし、報われるには速い、

遅いがあります。それはそれで一つの道理なのです。我が父は善を積み徳を成されま
 したので、それによって隆盛を享けるはずでありました。しかし、その身には及ぶこ
 とがありませんでした。それでも、ついには爵を賜り封を受けられ、榮を顕し大いに
 褒められ、実に三代の皇帝より御恩を頂戴するに至りました。このことは後世にま
 で表し示すべきことであつて、さらにその恩沢は子孫にも及ぶでありましよう」。

それで脩わたくしは先祖の名を碑に刻み、また我が父の遺訓を載せ、我が母が脩わたくしに教えて
 待つところがあつた理由も合わせて載せ、墓道に掲げるのである。

脩わたくしは徳が薄く、能がなく、たまたま時勢に遭つて位を竊ぬすむことができ、幸いにも大
 節を全うして、先祖を辱めることがなかつたのは、そのよつて来たるところがあつたと、
 こうして知らしめるのである。

先祖の遺徳によつていまの自分があるということを書いて、最後に本で言うところの奥付のようなものを添えます。

熙寧三年、歳は庚戌かのえいぬ、四月辛酉朔十有五日乙亥かのつとりさく、男、推誠保徳崇仁翊戴の功臣、觀文殿学士、特進行兵部尚書、知青州軍州事、兼管内勸農使、充京東東路安撫使、上柱国、樂安郡開国公、食邑四千三百戸、食實封一千二百戸の脩しゅう、表す。

熙寧3（1070）年とはいまお話している前の年です。歐陽脩はこの年に官界から引退し、この文章を書いたのです。熙寧3年はここにあるように成年で、そのちようど60年前の成年に、歐陽脩の父は占い師の予言通りに亡くなったのでした。父が59歳で亡くなって子が4歳であったので、歐陽脩はかなり晩年の子で

あったということがわかります。

——最後にずらずら肩書らしきものが並んでいたけど、落語の「じゅげむ寿限無」みたいなだね。退職した後で、名刺にこんなふう^に並べて刷ったら、あんまし感じよくないかも……ゼンゼン関係ない感想だけど。それで、「四千三百戸」とかっているのはなに？

Ⓣ 恩給の額のようなものだと言ってもいいでしょうか。二つの数字があるのは名目額と実額です。それだけのものを得ているのも、父が善を為した報いによるというわけなのです。

この文章で欧陽脩の生い立ちから引退までのあらましをおわかりいただいたと

ところで、二つ目の文章です。これは、2度目の左遷を経験した39歳のときに書いたものです。

ごく手短にその経緯を申し上げますと、欧陽脩は夷陵に飛ばされてからしばらくは地方を転々とし、政治情勢が大きく変わって、ついに范仲淹の主導のもと、待望の改革が始まりました。欧陽脩も中央に復帰し、改革の中心人物の一人となったのですが、改革が始まるとすぐに守旧派が猛然と巻き返しを図り、その勢いに押されて皇帝はあっさり方針を転換させてしまい、范仲淹はいわば梯子をはずされて宙ぶらりんの状態となって進退に窮し、やむをえず都を去りました。欧陽脩は改革の灯を消すまいと都に残って孤軍奮闘し、守旧派の集中砲火を浴び、それでも果敢に闘い続ける欧陽脩に対し、守旧派は奥の手で一つのスキャンダルを持ち出しました。私が帰郷の旅において商行為を行った不道德者であると告発さ

れたのと似たような手口でした。

——へーえ、スキャンダスかあ。正面攻撃より、足をすくうほうが楽に倒せるってことだね。今度は「週刊文春」と「週刊新潮」とどっちが頑張ったの？

ⓧ 「週刊新潮」の方でしょうか。言ってみればセクハラ事件でありますので。

当時、欧陽脩は徴税に関わる仕事をしていて、地位の高さも財務政務次官と同程度だったと言えるでしょうから、昨今日本でお騒がせの事件と無理やりの比較もできなくはありません。ただし、録音記録が編集部に持ち込まれたわけではなく、私は欧陽脩は潔白であったと信じています。

あらましを言えば、欧陽脩には一人の妹がいて、張ちようという人に嫁ぎました。張

には先妻の生んだ娘がいて、妹が嫁ぎ先で亡くなると、欧陽脩は親戚のよしみで先妻の娘を引き取って養い、親類の者と結婚させました。先程も言いましたように、官職に就いてお上から俸禄を得るようになった者は、一族全体の繁栄のためにあれこれ面倒を見るのが普通でありましたし、欧陽脩自身、幼くして父を喪つて苦勞したので、できるかぎりのことをしてやろうということであつたのです。ところが、張の娘は婚家の使用人と怪しい関係となり、それでごたごたもめてしまい、やぶれかぶれとなつたものか、嫁に出される前に、欧陽脩に財産を奪われた上に、関係を迫られもしたと訴えたのでした。自分の悪を覆うためによりスキャンダラスなことを持ち出したのでしよう。

守旧派はすぐにこのスキャンダルに飛び付き、欧陽脩の人格を攻撃しました。セクハラの方は立件のしようがなく、張の娘の財産を欧陽氏の名義に振り替えた

のは事実であったことから、それは道義的に問題なしとは言えないということ、
 欧陽脩は都を追われ、滁州じょという小さな町の知事となったのでした。

——ふーん、なんかおもしろいかも。事件自体がおもしろいってことではなく、
 人間の社会って、900年経っても意外と変わらなかつたりすることが、考
 えさせられるよなあ。とくにくだらないところがおなじで、普遍性があるって
 うのがなさけないかもね。

㊦ では二つ目の文章です。題を『すいおうてい酔翁亭の記』と言い、これは高等学校の古典
 の教科書によく採用されているので、もしかしてあなたも習ったのではないで
 しょうか。

——マジで？ 漢文の授業は基本睡眠タイムだったから、100パー覚えてない。だいたい歐陽脩という人の名も、トーバー君から聞くまで知らなかったと思うんだけどなあ。

㊦ 『酔翁亭の記』の書き出しは、

環滁皆山也（滁を環りて皆山なり）
め

という7文字です。何の工夫もないようできて、これが手本とすべき名文とされ
ています。

——へーえ、そうなんだ。

名文とされる理由を、ボクが当ててみせよっか。漢文の授業は眠っていても、ボクだって英詩を学んだりしたんで、文章の良し悪しを見るセンスは少しはあると思うんだよなあ。

歐陽脩は下らないスキャンダルで都を追われて滁州にきたんだよね。アホらしいやら、悔しいやら、腹が立つやらいろいろあって、その思いをぶちまけてやろうとしたら、滁州がどういう土地なのか、けなすにしてもほめるにしても、いろいろぐだぐた、ふつうはいっぱい書きたくなるよね。それをたったの7文字に切り詰めたのが、名文だってことだよな。ちがうかなあ？

㊦ まさしく正解です。欧陽脩は、何度も何度も書き直した末にこの7文字にたどりついたとされています。あなたがおっしゃる通り、最初は滁州の風光を詳細に長く叙述していたのを、最後にはわずか7文字で十分であると見切ったことで、最も平明で簡潔なこの名文となったのです。この書き出しこそは欧陽脩の文章の特徴を最もよく表しています。

滁州をめぐるは皆山である。

森や谷が最も美しいのが西南の峰々だ。望み見てこんもりとして深くすぐれた姿の山がある。琅琊山ろうやさんである。

山道を行くこと六里ないし七里で、さらさらと水の流れる音が聞こえて来て、二つの峰の間から湧き出る泉がある。醸泉じょうせんである。

峰を回って道が折れ曲がる先に、翼を広げるようにして泉のほとりに立つ建物がある。

すいおうてい
醉翁亭である。

醉翁亭を作ったのは誰か。山の僧の智僊ちせんだ。醉翁亭の名を付けたのは誰か。滁州の太守その人である。

太守は客人と連れ立ってここに来て飲む。少し飲むとすぐに酔い、しかも一番の年長だ。だから自ら号して「醉翁」と言うのである。

醉翁が思いを寄せるのは酒ではない。山水の内うちにいることだ。山水の楽しみを心に得るために、それを酒に含ませて飲むのである。

山に日が昇るとき、林の雲気は明るく開かれる。山に雲が帰るとき、巖いわの穴は暗く塞がれる。明暗がこうして変化するのは、山の朝と暮れである。

野の花が開いてかすかな香りを放ち、木が盛んに繁茂して深い蔭を作り、風が高く

吹きわたって清らかな霜を降らせ、水が落ちて石が現れ出る。これは山の四季である。

朝に行き暮れに帰る、あるいは四季それぞれの景色は同じではない。だから、その楽しみは無窮である。

ここにおいて、担う者は路傍に歌い、歩く者は木の下に休み、前の者が呼べば後ろの者が応え、腰の曲がった老人がいれば手を引く童子がいる。往来して絶えることがないのは、滁の人の「遊」である。

ここにおいて、溪たにに臨んで漁をすれば、溪は深く魚は肥えている。泉の水で酒を作れば、水は香かぐわしくて酒は清らかである。山の幸、野の幸を雑然と前に並べるのは太守の「宴」えんである。

ここにおいて、宴たけなわが酣たけなわとなつての楽しみは、楽器の糸や竹が生む音色にあるのではない。

矢を射て当たるか外れるか、碁を打つて勝つか負けるか、賞罰の杯が入り乱れ、立つ者もいて座る者もいて、騒がしく言い募るのは、大勢の客人の「飲」である。

ここにおいて、蒼い顔、白い髪で、この「遊」「宴」「飲」の間にあつて身を崩しているのは太守の「酔」である。

かくて夕日が山に入り、人影が散り散りとなつて、太守が帰るのなら、客人もそれに従う。樹林は陰翳を深くし、上下に鳴く声は、遊ぶ人々が去つてからの鳥たちの楽しみである。

鳥は山林の楽しみを知っていて、人の楽しみを知らない。

人々は太守の遊びに従つて楽しむことを知っていて、太守の楽しみは人々が楽しんでゐるのを楽しむどころにあるのを知らない。

酔えばその楽しみを人々と一緒にし、醒めればそれを文章にして述べる。それをす

るのが太守である。

太守とは誰なのか。廬陵ろりょうの欧陽脩である。

廬陵とは欧陽脩の出身地です。最後に自分の名を出し、これが自画像であるということを明示しています。

——えーと、山の中で宴会を開き、人々と遊んで呑気に暮らしているのが、この自分であり、まことに結構な身の上でございますぞよってことなんだけど、それは見せかけだつていうのは、ボクでもわかるよ。

都から追い出され、その自画像として、町の人々とも自然ともすつかりなじんでいる様子を描いているのって、たぶん精神的に非常に強靱で、「おれっち、こつ

ちにきて、少しもへこたれておらんぞよ。都にいる連中よりもっともっと人間的に豊かに暮らしておるぞよ」って、堂々と宣言してるってことだよな。

㊦ まさにその通りです。漢文のテストなら100点満点で120点ぐらいあげたくなります。

文章の中に「少し飲むとすぐに酔い、しかも一番の年長だ。だから自ら号して『醉翁』と言うのである」とありました。このとき欧陽脩は実は40歳で、いまよりいくらか寿命が短い時代でも、40歳でさすがに一番の年長ということはありません。スキャンダル攻撃を受けた欧陽脩としては、「わしはすでに翁である。ふしだらな情欲など持ち合わせておらん」と、暗に言っているのかも知れません。

——そこんところはどうか。かなりのおじいさんになっても性欲っていうものは結構あるらしいからね。介護してても、なんか触ろうとしてくる人がいたりするもんなあ。それだけ元気なのかもっていう阿呆もいるけど、はつきりいって、気持ち悪くて、バツカじゃないのってことでしかないんだよなあ。ボクなんかは、それほどの経験はないけど、介護の現場では深刻なセクハラ被害があるらしいね。いまのお年寄りには、人生のほとんどが、セクハラってことばがない時代だったんで、財務大臣ほどではないにしても、そもそもセクハラということに無理解だったりするんだろうなあ。つまりさあ、再教育が必要ってことだったりするんじゃないのなかあ。60歳になったら、義務として老学校に通うっていうのはどうか。老人としての新しい常識を身に付けてもらうためにね。財務大臣なんかきつと卒業させてもらえないから、社会に垂れ流す害毒がなくなっていくんじゃない

のかなあ。

ごめん、どんどん関係なくなっちゃったね。

㊦ 三つ目の文章も自画像です。その題名を『六一居士伝』ろくいちこじでんと言います。「六一

居士」とは欧陽脩が64歳になって名乗った新しい号です。「伝」とは言うものの、
自叙伝というようなものではありません。

私は滁山に流されたときに「醉翁」と自ら号した。あれからすでに老い、すでに衰え、
かつ病んだので、いよいよえいすい潁水のほとりに引退することにし、ここにさらに「六一居士」
と号することとなった。

このように書き出していますが、欧陽脩はこれより前から地方の知事を勤めていて、王安石による改革が始まると批判の声を挙げ、それに対する仕打ちとしてより小さな町に任地替えとなり、熙寧3（1070）年7月にそこに赴任し、そして9月に引退を決意してこの『六一居士伝』を書きました。それは私が潁州に行つて欧陽脩に会うちょうど1年前のことです。欧陽脩はかねてから引退後は潁水のほとりの潁州に住むと決めていました。

ある客人が問うには、

『六一』とはどういう意味なのでしょうか」

居士が答えるには、

「吾が家には蔵書が一万巻あります。三代以来の金石の遺文を収録したのが一千巻

さんせき

あります。琴が一張あります。囲碁の盤が一局あります。そして常に置いてある酒が一壺あります。『一』とはこれらのことです」

客人が言うには、

「それでは『五一』なのではありませんでしょうか」

居士が言うには、

「吾が一人の翁がいて、この五つの『一』の間で老いております。というわけで『六一』ということになりませんか」

客人が笑って言うには、

「先生はしばしばその号を変えておられますが、いわゆる『名から逃れようとする者』、つまり、世の評判から逃れようとする人なのではありませんでしょうか。しかし、それは、かの莊子の譬え話にある『影を畏れて走った者』と同じになってしまうので

はないでしょうか。影を畏れた者は、影がどこまでも付いて回って来るのを憎み、一日中逃げ回ったあげくに、疲労困憊して死んでしまったと言います。私は、先生が疾走して、ひどく喘ぎ、死ぬほど喉を乾かして、しかし逃げ切れないでいるようにお見受けいたします」

居士が言うには、

「私は、もとより、名から逃れられないことを知っています。そして逃れるべきではないとも知っています。私が新たな号を名乗るのは、自分の楽しみをいささか志しるそうとするだけです」

客人が言うには、

「その楽しみとはどういうものでしょうか」

居士が言うには、

「私の楽しみは道と一つになるより勝るとも言えましようか。楽しみイロミの意を五つの『一』の間において得ることがでたならば、泰山たいざんが身の前にあつても目に入って来ませんし、落雷が柱をへし折つても驚きません。洞庭どうていの野で聖人を称える壮大な音楽が奏でられても、涿鹿たくろくの原で極悪の敵を打ち破る大きな合戦が行われても、その心地よさ、その快さには及ぶものではありません。しかし、五つの『一』の間での吾が楽しみを極められないでいるのを、これまで私は常に患っていました。私にまとわりつく世事がたくさんにあつたためです。その大きなものは二つです。第一が官服、官印等で、それは外側から私を疲れさせます。第二が憂患、思慮等で、内側から私を疲れさせます。私の肉体は病いではなくてもすでに悴かじみ、私の心は老いるよりも先に衰えてしまつて、五つの『一』の間で楽しむ暇がどこにもなかったのです。それで私はこの三年の間、身を退くことを朝廷に願ひ出ておりました。ある日、陛下そくせんは惻然とこのことを哀れまれ、

引退することを許して下さいましたので、この五つの『一』とともに我が身は田舎の廬いわに帰れるようになり、かねてからの願いが叶うこととなったのです。これが私がいさゝか志しるぞうとするところのものです」

客人はまた笑って言うには、

「先生は官服、官印等が身体にまつわるものであるのを御存知ですけれど、五つの『一』が心にまつわるものであるとは思われないのでしょうか」

居士が言うには、

「そうではありません。官服、官印等がまつわって私をすでに疲れさせ、たくさんの憂いを生みましたけれど、五つの『一』はすでに私を解き放ち、幸いにも患うところのものはないのです。私はどちらを選えらぶべきでしょうかな」

ここにおいて客人は立ち、私の手を取って大いに笑って言うには、

「まったくもって比べるまでもありません」

そして、居士が嘆息して言うには、

したいふ

「そもそも士大夫たる者は、若いときには仕え、老いては休んでよく、七十歳まで待たなくてもよろしいとされています。私はもともとその考え方を慕っておりました。

官職から去るべき第一の理由がここにあります。私はかつて大事な御用を勤めさせて

ほしまま

いただきましたが、称賛を縦にしようとする気はさらさらありません。官職から

去るべき第二の理由がここにあります。壮年の頃からそのようにあるべきと考え、今

はすでに老いかつ病んでおります。強いて身を働かせようとしても難しく、それでい

ながら過分の栄禄を貪るのは、まさしく本来の志に違い、自分の日頃の言辞を根底か

ら覆すものです。官職から去るべき第三の理由がここにあります。去るべき三つの理

由があるのですから、たとえ五つの『一』がなくても私は去るべきなのです。これでも

う言うべきことは尽きましたでしょう」

熙寧三年九月七日、六一居士自らかく記す。

——えーと、最近は「老害」という言葉をあんまし見なくなった気がする。たぶん、超高齢化社会に向けて、いくつになっても社会のなかで活躍してもらわないと困るという事情のほうが大きいらなんでしょうなあ。でも、実際には「老害」ってあると思うよ。自分で若いと思いついでるのが、いちばんタチが悪かったりするんだよなあ。やっぱりさっきの老学校だよ。

いまの文章で、去るべき理由を一生懸命に並べているのを聞くと、逆に未練があるんだろうなあって感じてしまうのは、根性の曲がった読み方なのかなあ。五つの「一」の楽しみがあるっていうのは、要するに興味がたくさんあるから、それ

で楽しく老後を過ごせるってことなんだろうけど、わざわざ客人との問答を作ってそういうことを書くのって、なんかわざとらしさを感じてしまう。

ごめん、ボクって、やっぱりひねくれてるよね。トバー君の大恩人に対して、こんなこといっちゃいけないだよなあ。

それで反省して、改めて、三つの文章を聞かせてもらった感想をまじめにまとめると、幼いときにお父さんを亡くした欧陽脩の生涯についてほしいのことがわかったような気がする。前に聞かせてもらったことも思い出して、全体の印象としては、欧陽脩っていう人は極めて例外的な幸運な人なんだろうなああって感じかな。幸運っていうのは、運よくうまくいっちゃってラッキーというのではなくて、挫折したことも含めて、自分の人生をどのように生きるのか、自分の意志を貫けたってことなんだけど。トバー君が宋の時代の人は理屈っぽかったってよ

くいうけど、欧陽脩もそうだよね。左遷されるとかの困難があっても、感情的にならずに、理性的に考えることで乗り越えたんだろうね。そういうことができたというのも、そういう時代に生まれたからで、それも含めて幸運なのかなあつて思ったんだ。でも、宋の時代の人は理屈っぽさも、実は欧陽脩のような人が一つの典型を作つて、トーパー君のような後輩が継承したと考えるなら、人が時代を形成したということになるよね。

Ⓣ 立派な感想をありがとうございます。100点満点で、今度は150点としましようか。

私の旅に話を戻します。陳州から潁州まで弟も同行し、欧陽脩との久し振りの再会を果たしました。私の父が亡くなって眉山に帰郷したときに都で別れて以来

で、5年余りの歳月が経過していました。

もともと白髪が多い性質たちでしたから、このとき65歳となっていた欧陽脩は、髪も髭も全てが真っ白になっていて、一見すると俗世間と縁を断った仙人であるかのようでした。しかし、その実、あなたが指摘されたように未練があると言いますか、心の内はなお脂ぎっていました。

潁州に西湖という小さな湖があり、欧陽脩はその風光をことのほか愛し、それで引退後は潁州に住むと決めたほどで、「何はともあれ、ここを見てくれ」と、私達兄弟はすぐに西湖に連れて行かれました。そのときに詠んだのが次の詩です。

欧陽公はなお壮年であるかと言うと、

髭は雪のように真っ白である。

欧陽公はすでに老年であるかと言うと、

頬はてかてかと赤く光っている。

欧陽公のもとに参上すると、

早速湖の畔で美酒を飲むこととなった。

欧陽公は酔えば酔うほど縦横に談じ、

ついには激烈な言辞を吐くまでになる。

湖辺の草木に霜が降りるような季節になったが、

芙蓉や菊の花が競い合うように明るく咲いている。

花を手にし、欧陽公の長寿を祝して舞うと、

欧陽公はこのように言う。

「百年生きたところで、

びゅうと風が吹き過ぎるようなものだ。

仙人の仲間入りをして遊ぶのも悪くはなからうが、

そのためには飢えを忍んで仙薬を飲まなければならぬのなら御免蒙ろう。

若死にするか長生きするか、勝手に決めてくれと、

疾とうから天帝に任せてある。

どっちを選ぶか頭を悩ませるのは天帝であるのだから、

私はこの世で楽しんでいけばいいだけなのだ」

視線を上げると、

鳥が町から夕靄の中へと飛び去って行く。

視線を下げると、

灯さけがめに照らされた銀の酒みなも缸がめが湖の水面みなもに映っている。

この詩を歌って、

まだまだ飲んでいただこうと欧陽公に勧める。

残念であるのは、

我等兄弟には、宴席において琴を奏し、

その音で皇帝と大臣のわだかまりをときほぐしたような腕前がないことだ。

最後はある故事を用いていますが、説明を加えなくても、なんとなくわかっていただけるのではないのでしょうか。

——さっきの文章では、欧陽脩が引退を願い出て、皇帝にそれを許してもらった
って書いてあったけど、本当のところは、うるさく改革に反対するような老人に

は現役から退いてもらおうということだったんだらうね。トバー君だって都にはいられなくなったんで、皇帝とのわだかまりをときほぐことなんかできないよね。朝廷に不満がありながらも、天帝にお任せだと、要するに自分に問題があるのではないと言い放ったってことなのか。

㊦ 酔えば酔うほどに、欧陽脩の言説は激しさを増して行きましたので、私達兄

弟もその勢いにたじたじとなり、話題を政治向きのことから歴史や文学の方に振り向けますと、欧陽脩は、

「諸君等に言っておこうと思っていたのだが、諸君等は、詞ウチというものをいまだに不当に軽く見ているのではないのかな。詩シは二千年にわたって詠まれ続け、人間界になくってはならないものであると、誰もが思っている。詞にはその十分の一

程度の歴史しかなく、管弦の曲に合わせて宴席の戯れとして歌うようなもの、人間界にとつてなくても構わず、むしろ社会に害を為すくらいに思われておる。詩には杜甫や李白を始めとして幾百人もの名手が出て、様々な可能性を開拓し、いまや新たなものを生み出すのが困難になっている。詞には心血を注いだ者はまだ数えるほどしかおらず、そこには大きな可能性が潜んだままとなっておる。わしはかねてから幾つかの試みをして来たが、なかなか理解されず、どうしてそのような下世話なものに手を染めるのかと、かえって批判されもした。諸君らにして、も、わしの詩や文章は読んでくれているようだが、詞について全く無視しておる。それが不満でならない」

歐陽脩は私達兄弟を睨み付けてからにっこりと笑い、

「残念ながらここには楽器がない。『采桑子』さいそうしという曲を、諸君らは聞いたことが

あるか。どこかで耳にはしているであろう。わしが聞かせてやろう」

欧陽脩はハミングでその曲を歌うと、

「このようなメロディーに李煜りいくが付けたのがこういう詞だ」

テインチンチンチンチンチンチン

庭前春逐紅英尽

ウタイバイフアイ

舞態徘徊

シユファイウエチ

細雨霏微

ブファンシエンメイシツァンカイ

不放双眉時暫開

リュウツァンレンチンファンイントクァン

緑窓冷靜芳音断

シファンインチエンフイ

香印成灰

クナイチンフアイ
可奈情懷

ユシイメンロンルメンライ
欲睡朦朧入夢來

——トバー君、ホントに歌ってくれちゃったんだ。いつか、音痴だとかいってなかったつけ？ 初めて聞くんで、音程がはずれていてもゼンゼンわかんないけど、案外じょうずだったりしない？ 聞いてて、なんか感じるものがあるかも。なく、なよつとした軟弱な歌なのかなあって気がした。中国語の意味がわかんないんで、ホントに感覚だけだけど。それはいいんだけど、大きな声で、まわりのお客さんがみんなこつちを見て、ちよつと恥ずかしかつたかも。

ト

欧陽脩は歌い終わると、

「わしが今この曲に新たに詞を付けよう。聞いてくれ」

シニエンチエフシ チェンチエンク
十年前是尊前客

エエバイフジンチン
月白風清

ヨウファンチエアオリン
憂患凋零

ラオククワンイン スク チン
老去光陰速可驚

ピンファアズイカイシンウ カイ
鬢華雖改心無改

シバ チンコン
試把金觥

チウク チエイトイン
旧曲垂聴

ヨウシ タンニエンツエオリ シミン
猶似当年醉裏声

——ん、同じ曲だった？ ホントに？ なんか感じが違ったみたいけど。とくに、最後のところが……最初に聞いた方はふわっと消えるように終って、いまのは妙に力が入っていなかった？

㊦ メロディーは同じでも、内容に合わせて歌い方を少し変えてみました。

最初の詞の作者の李煜りいくは、宋の前の時代、中国が多数の国に分かれていた五代十国時代の「十国」の一つである南唐なんとうの三代目にして最後の皇帝だった人です。南唐の都は金陵きんりやう、いまの南京なんきんにあつて、長江下流部の豊かな土地を広く統治して比較的良く平和を保ち、唐代の文化を受け継いで、当時最も高い文化水準を誇っていました。特に李煜は感受性豊かな文化人で、もしも皇帝でなかったならば、

諸芸に通じた第一級の芸術家になっていたことでしょう。しかし、政治家としては三流で、日々を遊興に費やし、北方に興った我が宋に対しては、物資を買いで緊張を和らげる以外の方策を持たず、25歳で皇帝になって40歳で国を亡ぼし、42歳で宋の都で軟禁状態のまま世を去りました。

李煜の詞を普通の日本語に直すと、このようになるでしょうか。こんどは歌いません。メロディーに合わせて日本語の訳詞をはめこむほどの技量は私にはありませんので、それはお許しいただきます。

庭先の春は、紅の花を追いかけて、尽きてしまうのでしょうか、
くるくると舞い散るその姿の中で。

しとしとと細い雨は、

二本の愁いの眉へとひたすら注ぎ続けます。

ひんやりとした窓辺から、良い音は絶えたまま、

香が燃え終わって灰になっちゃってしまっても。

この思いはどうしたらいいの、

眠ろうとしても、朦朧もうろうとして夢に入ってくるのは何？

——ああ、さつき聞いた歌いっぷりに、この内容は合っているかも。たしかに、なよつとした詞なんだ。トバー君の詩とはまるつきり違う。英語の詩でいうと、エミリー・デイキンソンに近かったりするのかな。ゼンゼン違うかな……。

㊦ 李煜は詞の可能性のある一つの側面を深く追求した人でした。繊細過ぎる自身の感覚には、詩という形式よりも詞でなければならなかったのでしょう。しかし、李煜が国を亡ぼした皇帝であったことから、李煜の詞の芸術性はほとんど評価されず、そもそも詞は価値の低いものであるとみなされてしまいました。ちなみに、欧陽脩は李煜が皇帝であった南唐がかつて統治していた土地の出身で、南唐文化の継承者であるとの気持ちもどこかあって、詞に力を入れていたのだらうと思われまます。

次は欧陽脩の詞です。

十年前にも私は酒の前にはいました、
やはり月が白く、風が清らかで。

憂患を経て、私は消え行くばかり、

老いて光陰のいよいよ速いのに驚かされます。

白髪ばかりに変わっても、心は変わりはない、

試しに金の盃を手にとってみましょう。

さあ古い曲を聴いてもらいます、

かつての酔っての声にまだまだ同じであります。

——なるほどねえ、最後のところで力が入る理由がわかったよ。団塊の世代の
たちが、拓郎かなんかを歌って、「俺たちって昔とおんなじだよなあ」みたいにい
うのとそっくりってことだったりするのかな。

同じメロデーでも、付けることばが違つと印象がかなり変わるんだね。

㊦ 欧陽脩は歌い終わると、このように言いました。

『十年前、是れ、こ尊前そんぜんの客』と歌つた。十年でも二十年でも三十年でも同じだ。二十五年前、『人は知る、太守の遊ぶあそに從つて楽しむを。人は知らず、太守の其その楽しむを楽しむを』と、わしは『醉翁亭の記』に書いた。民衆が穏やかに暮らしているのを見るのが、お上の仕事をしていて最も嬉しいことだと、このときわしはしみじみ知つた。昨日の良き暮らしが今日も続き、今日の良き暮らしが明日も続くのなら、民衆は安心していられる。日々がずっとそうして過ぎて行くのなら、民衆はお上が何をしているのか気付きもしない。『おらんとこの太守どんは毎日酔つ払つておるだけじゃ』と笑う。それが最も良い。それがいまはどうだ。都はも

とより、どこの田舎に行っても、大騒ぎではないか。矢継ぎ早に、あれをこうしろ、これをああしろ、何もかも変えろと、お上から指令が飛んで来る。役人も民衆も右往左往だ。今日がどうにかすんでも、明日になったらまたお上が何をさせようとするのやら、誰もが戦々恐々としている。太守に酔っ払っている暇などはない。どうしてこんなことになってしまったのか」

欧陽脩は深く嘆息し、

「あのときにわしを滁州に追いやったのは誰なのか。わしは恨むまい、怒るまいとした。滁州に行って、民衆の楽しみを知った。それはまことに良いことであった。しかし、今思うと、あのときに改革が頓挫しなかったならば、今のこの騒ぎなどはなかったのだ。あのときにすでに国は病を脱することができたはずなのだから。ああ、やはり、恨むまい、怒るまい。わしらがやり遂げられなかったのが

良くなかった。わしらが失敗したのだ。他人のせいではない。わしらがきちんとやらなかったから、国家の病が膏肓こうこうに入って、この荒療治が必要になってしまったのだ。わしの声は変わらない。わしの情熱も変わらない。しかし、残念ながら、二十五年の歳月は容赦なく流れてしまったのだ」

——また大声を出しちゃって……欧陽脩に激しい思いがあつたということとはよくわかつたから、ちよつと落ち着いて……ライチサワーを頼んでおくね、ラストオーダーの前に。

㊦ そろそろ今夜もべの時間ですね。

欧陽脩は幸運だったと、先程のあなたのご指摘は大局的には正しいと思います。

宋の時代でなければ、4歳で父親を亡くした欧陽脩が、文学の革新運動の先頭に立つような活躍はできなかつたことでしょう。しかし、欧陽脩がついに国家の中樞の加わったときに、皇帝の実父をどのように祀るのかという論争に巻き込まれてしまったのはまことに不運でありました。それによって時間を空費し、神経をすり減らし、欧陽脩自身が改革を推し進める機会を永遠に失われてしまったのです。

西湖において、欧陽脩は激しい思いを詞に込めて歌いました。それは私にとって衝撃的でした。詞とはもっぱら人の心の弱い部分を情緒纏綿と歌うもの、それが私の用いる文学形式にはなることはないと思っていました。しかし、それは短慮であると、欧陽脩に一喝されたのです。あなたが何度もおっしゃる通り、私の詩は理知的、あるいは理系的なものになっていました。それは私の全てではなく、

詞にこそ託すべき何かがあり、そして詞には開拓すべき大きな可能性がある」と、
欧陽脩は指し示してくれたのです。


とは言え、すぐに欧陽脩に習って詞を作るといふことはできなくて、私なりに
詞が作れるようになるまでには数年の歳月を必要としました。

——それはまた後の話ということで、今夜は終わりかな？

Ⓣ もう一つだけ詩を聞いていただきます。

欧陽脩が「六一居士」と号したのは、家に蔵書が一万巻、琴が一張、碁盤が一
局、酒が一壺と、金石の遺文が一千巻あったからです。「金石の遺文」と言うの
は、石や金属に刻まれた古い時代の文字のことです。欧陽脩はその拓本を大量に

収集し、書物に記されたものだけでなく、そうした考古学的な資料も歴史の解明に使うべきだと、学問の対象にしようとしていました。

——そういえば、石に刻んだ文字についてトバー君が詩を詠んだのがたしかあったよね。えーと、鳳翔で作った「デビューアルバム」だったよね  第6回。

 よく覚えておられます。『鳳翔八観』ほうしょうはつかんの第一首、石鼓せきこを歌ったのがそれです。

あの詩は、欧陽脩の影響を受けて詠んだものです。

欧陽脩はいろいろな古い物を集めていて、私達兄弟にあれこれ見せて下さいました。そのうちの一つ、石の屏風を見て私が詠んだ詩があります。

誰がこの石の屏風を欧陽公のために遺したのか。

石の上に淡い墨の痕があり、

林とか草とかは描かれていない。

それとなく見えるのは、

雪を載せた峨眉山がびさんの西の嶺か。

そこには一万年を超える不老の松がある。

嶺に近付こうとしても、

崖が崩れ、谷は断ち切られている。

もやもやと空を覆う霞、

力強く差し込む夕日、

風の真の姿が描かれていて、

これを見て初めて天の巧みを知ることが出来る。

私が恐れるのは、

畢宏、韋偃ひつこう いえんのような昔の画工が、

死んで葬られても、

心はまだ画を極め尽くしていないのに、

骨はすでに朽ち果ててしまっていて、

その腕を揮うことができなくて、

思いを描き表せない苦しみの内にあること。

それで、果たせぬ思いが墨の痕に化して、

この石に宿ったのではないだろうか。

古来、画師は俗士ではないとされ、

物と現象を掴んで描き出そうとするのは、

詩人とほぼ同じなのである。

願うのは、欧陽公が詩を詠んで、

畢宏、韋偃の二人の不遇を慰め、

幽明宮で憤りの余り泣いていないでいいようにしてさしあげることだ。

——いまの詩は、あんましくわかんなかったんだけど。昔の画家が思う存分に描けずに生涯を終えてしまったので、死後の世界で憤っていて、それが石の屏風の画に表れ出ているってこと？ 欧陽脩にもそういう憤りがあるってことなのかな。

詩の解釈としては、そういうこともあるとして、石の屏風ってどういう感じの

ものなのか、イメージがわからないんだけど。石を削って屏風の形にしたのかな？

㊦ 石を薄く加工して屏風の形に組み立てたもので、大きさとしては、両手で普通に抱えられる程度でした。表面に描かれた画は墨が薄れて判然としないので、この詩はかなりの想像力を働かせて詠んだのでした。

あなたのご指摘通り、欧陽脩には憤りと言っていいほどの激しい思いがあり、若い頃と変わらないと詞に歌ったほどお元気でありましたが、それからわずか1年足らずで、実は亡くなってしまったのです。

——あつ、そうなんだ。じゃあ、このときに会えたのはラッキーだったんだね。

ⓧ まさに幸運であったのです。欧陽脩が引退を余儀なくされていなければ潁州にはいなかったはずで、私も弟も朝廷での仕事が順調であったならば潁州に旅する暇はありませんでした。張方平が都を出ていなかったならば、弟は陳州に呼ばれず、私が杭州に向かう途中で弟と一緒にになって潁州に行くということはありませんでした。こうした幾つものことが重なって3人が一緒に会えたのですから、まことに幸運であったのです。

——何がいいやら悪いやら、わからないってことだね。ボクだって、いろいろまくいかなことがあったから、こんなふうにこの店にきて、トバー君とこんなふうに話してるんだよなあ。これも幸運ってことかもね。

そんなもって、ボクにしたって、いつサーフィンに失敗して、沖に流されその

まま帰ってこないなんてことにならないとも限らないかも。「ああ、あれが最後だったんだ」って、トバー君がいつかどつかで惜しんでくれるのかも。

㊦ 今夜の最初に杭州に到着するまでお話ししようと申し上げていながら、途中で終わってしまうのは、よくないような気がしてきました。これが最後なら、きちんと区切りのいいところまで進めておくべきでしょう。とは言え、「吾が行もまた偶然」、たまたま中途半端なところで終わってしまうというのも悪くはないのでしようか。

* * *

イノ君が持ってくる音声データを文字に直す際に、録音されているままに、一

対一対応で正確に余さず文字化しているのではない。冗長すぎるところを省いたり、文脈の乱れたところを整理したり、仕草や阿吽の呼吸で示されていると思わるところをあえて言葉で表したりと、いくらか手を加えている。趣旨を曲げるようなことはないよう注意しつつ、目で文字を追って理解しやすいようささやかながら工夫をしているのである（例えば、トバー君が原文を示しているところでは、実際には、イノ君が百均で買った小さなホワイトボードを使っているのだが、そういったことはいちいち記していない）。

今回、わたしの力量では、文字によって表現できないとあきらめなければならぬものがあつた。それは欧陽脩を語る際のトバー君の声に籠められているところの何かしらのものだ。

トバー君とは何者であるのか。蘇東坡その人であるということはありません。

それでも、本人が蘇東坡であると名乗っているのだから、それを前提として楽しむということでも悪くはないだろうと、ある時期からわたしはトーパー君の正体を問わないようにしてきた。

歐陽脩について語るときのトーパー君の声は、それが蘇東坡らしく見せるための演出だとしたら、相当に凝ったものであると言わねばならないものであった。イノ君の前でそこまでするのはどうということなのだろうか。

もしも蘇東坡という人がいなかったなら、歐陽脩が宋代を代表する第一の文人だったということになっただろう。蘇東坡があまりにも巨大であったために歐陽脩の影が薄くなり、その作品もそれほど読まれなくなってしまった。わたしにしても、これまで歐陽脩についてわずかしか知ることがなかった。今回の録音を聴きつつ、三つの文章に限定せずに、トーパー君の声で歐陽脩の作品をもっと多く

語ってもらいたい、イノ君がそのように誘導してくれないだろうかと思ったのだが、あっさり終わってしまった。イノ君はいささか鈍いではないかと、あえてここに不満を記しておきたい。

歐陽脩に対するトバー君の並々ならぬ思いはどこからきているのか。蘇東坡その人ではないのならば、本当なら歐陽脩を語りたかったのだろうか。相手もしもイノ君でなかったなら、オヨヨ君とかいって居酒屋に現れたのだろうか。